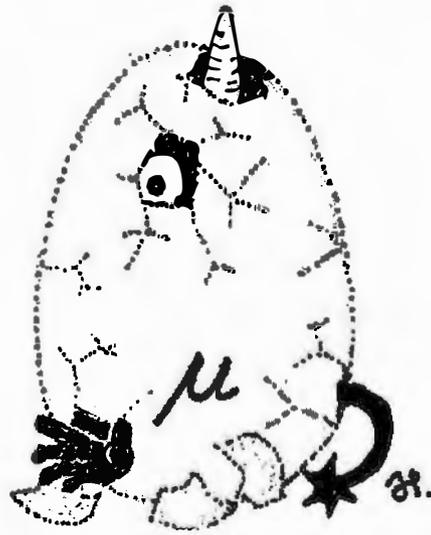


日本生物學會誌

最終号 (下)



日本生物學會

1997年 1月1日

「日本生物学会誌」最終号下巻 目次

石黒隆文：埼玉県における「君が代」のとりあつかいについて	2122
金井塚努：「日本生物学会」中国支部から	2124
富家雅子：大学の風景（その1）	2126
沢田さつき：生物学会誌の思い出	2129
山田和彦：しめっぽいあのころの私から感謝の気持ちを込めて	2130
遊興人：何を求めるか？	2132
半仙半魚：アミズ（AMIDS）	2135
石川順子：高校というところ～進学校でない場合～	2146
栗岡修平：日本生物学会消滅の日（序）	2148
奥野良之助：「日本生物学会」閉会のご挨拶	2150
会計報告（1996年度）付：総会計	2154
総目次（1～50号・おまけ号・最終号上下）	2155
総索引（同上）	2164

【上巻目次】

小野喜三郎：よい本ちよつとつまみぐい	2068
第1編集局長：一研の思い出	2072
加藤喜代志：奥野良之助氏の人と仕事	2074
なまけもの：木と本	2081
佐藤卓也：さかな魚サカナ	2082
岡田侑子：はじめでおわりのご挨拶	2100
長井幸雄：自然環境保全という名の自然破壊	2101
中山美香子：残念!! 「日本生物学会誌」	2102
平田幸雄：進化のゆくえ	2103
相生啓子：世紀末への鎮魂歌	2104
関西支部事務局長：総括	2112
関西支部：臨時総会報告	2113
田亀源五郎：雑木林が残されるために必要なもの	2114
二セコロジスト：「何冊かの本」――思いつくことあれこれ	2115
農林水産部長：里山考（1）――農業問題	2119
：里山考（2）――里山を守ろうということ	2120

埼玉県の高校における「君が代」のとりあつかいについて

石 黒 隆 文

金沢大学を卒業し、埼玉県の教員となって20年がすぎました。いまだに奥野先生からのマインドコントロールがとけず、校長・教頭からヒンシュクをかっています。さて、私の勤務する高校での小さな出来事を通して、「君が代」がどのように扱われているかを報告したいと思います。

県立杉戸高校は、埼玉県の東部――杉戸町にある、田舎のごく普通の高校です。今年で創立20周年をむかえ、どこの高校でもやるように、周年記念式典を行うことになりました。県のおえら方や、近隣の中学・高校長を集め、全校生徒につまらない長話を聞かせようというわけです。さらに迷惑なことに、その式次第の中に「国歌斉唱」というのが入れられていました。10月19日の式典にむけて、9月に総務係（管理職を中心とした10名からなる）が提案したものです。さっそく数名の先生方と異議を唱えました。すると“この件に関して議論したいので、「君が代」賛成意見を出すから、反対意見を出してほしい”との依頼がありました。正式に喧嘩を売ろうというのですから買わないわけにはいきません。以下にその賛成反対二つの意見を紹介します。

■国歌斉唱を創立20周年記念式典次第に入れることの是非について 賛成意見

① 主 体

創立20周年記念式典の主体は、杉戸高校PTA・同窓会・生徒である。

② 学校の姿勢

地域に根ざした学校、中高連携を進めていく現況において、教職員の思想信条上の我が儘は許されないのではないか。

③ 現在の状況

現行学習指導要領において、国歌の指導を行うべく位置づけられた。この時に賛否両論が戦わされた。

その後、社会党が与党に加わった時点において、国歌「君が代」論争は同党の闘争方針から取り下げられて「現場に於ける闘争とする」という、はなはだ身勝手な姿勢に変更した。

④ 結 論

総務係は、国歌「君が代」論争はこの時点において終わったという見解である。

■異議を唱えた立場上、賛成意見に対する私見を述べさせていただきます。

① 主 体

これがどのように議論にかかわるのかよくわかりません。あえて言うなら、本校の現・旧職員がはぶかれている理由が聞きたいものです。

② 学校の姿勢

そもそも「学校」とは何をさすのでしょうか？ 南向きに、五階建てで、ほぼまっすぐ立っている校舎をさしてはいないと思います。

では、生徒でしょうか？ 生徒総会でこのようなことが議論された記憶は私にはありません。

では、同窓会でしょうか？ 同窓会総会に出てませんので、私にはわかりません。

では、PTAでしょうか？ PTA総会に出てませんので、私にはわかりません。

では、職員会議でしょうか？ 職員会議でこんなことが決議された記憶は私にはありません。

願わくば、総務係がこれを決めたものでないことを・

内容については――ほんとうにこんな恐ろしいことをお考えなのですか？ 総務係の思想信条と異なる人間はすべて排除するお考えですか？ 日本国憲法一九条には「思想及び良心の自由はこれを侵してはならない」とあります。自分なりの思想・信条を持つことは人間としてあたりまえのことだと思えます。それを否定し、お上の言うがままに動くロボットになれとおっしゃるのですか？ そのような教師が、どんな生徒を育てるかを考えてみてください。『思想信条上のワガママは許されない』これがどんなに恐ろしい言葉か、総務係は誰一人として認識なさらなかったのでしょうか？

③ 現在の状況

過去のいきさつらしき事も書かれており、“現在の状況”なの？と首をかしげてしまいました。

まず、「現行学習指導要領において、国歌の指導を行うべく位置づけられた」とあります。ここで、各学校の周年行事に式典を必ず行わせ、そこで「君が代」を歌えと指示されたのでしょうか？ 卒業式・入学式に強制されたのは存じておりますが、周年行事という、やってもやらなくてもいい行事に「君が代」を歌えと指示されているとは思いません。とすれば、今回は管理職の票に対する点数かせぎかい？と勘繰りたくなります。そして今回「君が代」を歌うことで、これが既成事実となり、今後杉高のありとあらゆる場面に「日の丸」と「君が代」が出現するようになるのではないのでしょうか。

次に社会党の闘争方針が述べられています。私は社会党員ではありませんので、社会党が何をしようと思ったことはありません。本校の総務係は社会党とどんなご関係なのでしょう？ 社会党が言う“正しいこと”を無批判に“正しいこと”と思われる先生方なのですか？ 私は幼いながら、私なりの主義主張を持っているつもりです。

④ 結論

結論とは、論じつめた結果を明確にまとめたものと理解していましたが、総務係の先生方はちがうようですね。したがって、不明確な所を明らかにしてください。

まず、「この時点」とはどの時点なのですか？ 本校で「君が代」について論争されたのは、現教育課程を前だおしで行おうと強行された6年余前のことです。

それから「論争は終わった」とありますが、どのように終わったのでしょうか？ 結論と言うからには、明確に私にもわかるように書いてください。そしてそれを全教職員に示していただきたいと思えます。総務係がいつの間にか「学校」になってしまわないために
以上 文責 石黒 隆文

残念ながら、（当然のことながら）この二つは職員会議には出されませんでした。私が勝手に二つを職員室に掲示しましたが、総務係からはナシのつぶてです。

職員会議では、式次第に「君が代」を入れるか否かの議論がいちおう行われました。採決の結果は、「君が代」を入れるに賛成が19、反対21となりました。しかし、（これはいつものことなのですが）校長が、「私の責任においてやる」と強権を発動しました。そして式典当日、「君が代」は歌われたのでした。

以上が、「君が代」をめぐる一高校の様子とお考えください。まだまだ闘争は続くとお思います。このような状況を楽しむことができるようになれば、奥野先生に一歩近づいた事になるのですが、私にはまだまだ無理のようです。

「日本生物学会」中国支部から

金井塚 務

今朝の新聞を見て驚いた。なんと今日は10月31日、ということはあの日本生物学会誌最終号原稿の締め切り日ではないか。この忙しいのに全く迷惑な話だ。《この忙しいのに締め切り日を6日も過ぎてやってきた原稿のために、ワープロを叩くなど全く迷惑な話だ＝会長》でもこの忙しい中脅迫にのってパソコン（会長みたいにワープロではなくパソコンというところが世代の違いを感じさせるではないか。その分商業主義に侵されているとも言えるが）に向かっているなんて情けないことだ。《パソコンって、こんなに誤字が多くなるのかね》

でも世の中にはもっと情けないことがある。今朝の朝日新聞を見て、政府のやること考えていることのせこさに、ただただあきれざるばかりである。先日、国連の非常任理事国選出のための選挙があって、第一回目の投票で思惑通り、日本が8回目の当選を果たしたというのである。最多当選ということだが、真の狙いはこの実績を足場に常任理事国入りにあることは誰の目にも明らかである。それほど日本は国際的に信用されているのだろうか。どうもされているらしい。ただしこの信用というのがかなり怪しいものであることはいうまでもないことだが。

対立候補はインドだったのだが、選挙に先だって日本はお得意の札束攻勢、接待外交を繰り広げ、票のためなら女房も泣かす位のことは平気です。粟田のアフリカ諸国の国連大使を招いての大判振る舞い。まさかそのような接待だけで日本へ一票と言うわけではないだろうと思っていたとおり、今朝の新聞にその見返りとしか考えられない記事が目に入った。

その記事を引用してみる。

橋本龍太郎首相は29日、官邸でナミビアのヌジヨマ大統領と会談し、ワシントン条約で取引が全面禁止されているアフリカ象について、取引解禁を支持する方向で検討していることを初めて明らかにした。取引が解禁されれば、日本は最大の象牙の輸入国になりそうで、来年6月にジンバブエで開かれる同条約の会議で最大の争点になりそうだ。

ヌジヨマ大統領は「アフリカ象は今後二年でさらに増える。象牙の輸出解禁を支持し、日本への輸出を認めて欲しい」と要請。これに対して橋本首相は「野生動物は保護と利用の調和の原則により対処する。ナミビアの（主張は）原則に沿っており、専門家の報告を待って支持したい」と答えた。

何てことだろう。アフリカ象が二年でそんなに増えるのだろうか。そんなわけではない。妊娠期間だけでもゆうに二年あるものが。ただ移動によってある地域で見かけ上増えるということはあるかもしれない。

一般に観光で外貨が稼げない南部アフリカ諸国が象牙輸出解禁に熱心で、有名観光地の東アフリカ諸国ではそうでもないようだ。ただし、輸出解禁となって市場が再開されれば、どこの地域でも密猟が増えることは想像に難くない。実際、アフリカ象の牙は年々小さくなっているということだ。もちろん年を経るごとに牙がやせ細るという意味ではなく、大きな牙を持つ象が密猟されて、残っているのはほとんど牙のないようなものだけになってしまったという意味である。

そこで、ケニアではアフリカ象を保護しつつ住民の自立を促すための支援活動が行われているのでそれも紹介しておこう。

日本が本当に信頼されるには、このような住民が自立するためのプロジェクトを支援することだろうと思うが、それじゃ銭のモウ者には何の得にもならないということか。

このたび、みなさまにご協力をお願いしております「オルトプロジェクト」は「アフリ

能な土地柄でもあります。しかも、最近になって、この森がアフリカゾウの繁殖地であることがわかってきました。いつかは、たくさんの命を育む「ゆりかごの森」にも手をつけざるを得なくなるわけです。

オルトメ地区のマサイの人たちは、悩んだ末ケニア野生生物サービス公社（KWS）の元長官で、アフリカゾウ国際保護基金代表のP. M. オリンド博士（動物生態学者）に相談しました。その結果、自分たちの土地22,000ヘクタール（約180平方キロメートル、東京都の八王子市に相当）を私設の保護区＝オルトメ・マラ野生動物サンクチュアリー（聖域）に設定し、ゾウが繁殖する森を守ることにしたのです。具体的には、その森の近くに動物に影響を与えない程度に観光客を入れ、自分たちも自立できるように、オルトメ・マラを世界の人々に見てもらおうと考えました。

マサイの人々は協同組合を作り、自発的に共存計画を実現しようとしていますが、そのための資金がありません。そこで、今回の支援基金募集の運びとなったわけです。私どもは、同協同組合と以下の内容で書面による約束を交わすことにしております。

- 一口5000円で5年間（2001年まで）、1ヘクタール（約3000坪）を維持する。
- 支援してくださった方には、フレンドシップカードを発行する。
- カード所有者は、サンクチュアリーへの入場を無料とする。

何卒、こうした趣旨をご理解の上、支援基金へのご協力をお願い申し上げます。

なお、この基金はオリンド博士を介して、サンクチュアリー保護に使うとのマサイ族代表の確約書ももらいます。すでに1994年10月からは、密猟者の排除などを目的に、レンジャー部隊の活動も開始しております。

自然の中で人間と野生動物がいかに共存していくかは、21世紀に向けての最も重要な課題の一つとなっています。このような野生動物の保護と現地住民との共存のプロジェクトは初めての試みであり、成功すれば一つの世界的なモデルとなる可能性があります。大きな困難を伴う作業ではありますが、市民レベルで直接みなさんと力を合わせて、できることから始めていただきたいと考えております。

21世紀の子供たちにアフリカゾウがのびのびと生きている姿を見せてあげられるように、「オルトメプロジェクト支援基金へのご協力を重ねてお願い申し上げます。

アフリカゾウ国際保護基金（AEF）
オルトメプロジェクト支援委員会

ついでに一言。

ついに悪名高い「日本生物学会」が消滅するということが、本当にそうだろうか。会長がやめると言っているのだから、やめるのだろう。しかし本部が無くなったからと言って「中国支部」は無くならないし、このまま会長に案をさせるのはおもしろくないから、なんとか働かせる工夫はないものか。毎日思索しているのだが妙案が浮かばない。元々この学会は有ってないようなものだから、やめるやめると言ったってその内何処からともなく復活してこないとも限らない。幸い中国支部には印刷工場もあり、原稿が集まれば印刷して発行するくらいのことはできるのである。ただし、原稿が集まらなければ永久に出ないということはこれまで通りだ。会長が定年で大学を石もて追われ、印刷工場を奪われたとしても、どっこい中国支部がある。幹は枯れてもひこばえは残るものだ。会長が編集局長共々汗を流して原稿を集め、編集した上で、中国支部印刷局へ持ち込めば、今まで通り栄えある「日本生物学会誌」は発行できるという寸法である。

7局長：やめた方がいいと思いますね。本誌を中国支部で発行するなどは。

会 長：おれもそう思うな。

7局長：来年から会長が暇になって、月に2号分くらい原稿書いて送ったりしたら、どうするんでしょうね。

会 長：月2号はきついな。せいぜい1号分くらいやな。

大学の風景（その1）

1996年10月

富家雅子

歲月ひとを待たず、月日の経つのはまことに早い。1972年我が金沢大学に新設された生態学講座の助教授として30才代最後の年にさっそうと現れた若きエリート奥野良之助先生も、来年3月に定年退職されることとなった。この20年余年間の大学の変化はまことに驚くべきものがある。この変化は、奥野先生の頭髪の変化に勝るとも劣らない。頭髪の変化はいずれご本人に会って確かめて頂くことにして、大学の変化を教官の採用人事のやり方から見てみよう。

金沢大学生物学教室は来春4名もの教官、2教授と2助教授、が退職される。生物学教室は一新されるだろう。新しい教室はどうなって行くだろうか。それは教官採用の方針に関わっている。教授2名は公募されもう締め切られているから今頃選考が行われているだろう。どのような選考が行われているかわれわれ下々の助手にはさっぱり分からない。助手のみならず助教授にも分からない。生物教室には総勢20名の教官がいるが、選考にあたっているのはわずか4名の教授だけだからである。昔を振り返れば奥野良之助先生が選考された当時、助手、教務助手、助教授、教授、すべての教官からなる教室会議でけんけんがくがくの議論をしながら人事が行われていた。会議には応募者のプライバシー保護のため名前は秘されていたが院生、学生、職員に公開されていた。今はすべての教官にも非公開の密室で選考が行われている。

密室で行われていてもどんな基準をもとに選考されているのか考えるための資料はある。応募書類は選考に必要なことを要求するから、応募書類を見ればある程度のことかわかる。今回の教授選考のための応募書類を見てみよう（資料1）。これは自然史講座（旧植物分類地理学講座）の教授募集だが生命機構講座（旧動物生理生化学講座）でも全く同じ公募要旨が出されている。履歴書や研究業績目録はまあ常識だとして、20年前にはわれわれが考えられなかった項目がある。「（6）最近5年間の研究費（科研費等）の取得状況」という項目である。これは通常の国から支給されるお金（講座費）以外に特別に申請して得られる研究費を過去5年間にどれだけ取ったかを尋ねているのである。立派な研究者でありかつ立派な教育者である教官を選考するのに「いくら金を稼いだか」という下世話な話がなぜ必要なのだろうか。研究業績のとぼしさに対してお金を使いすぎている、日本はいま財政赤字で国民一人当たり300万の借金を抱えているのでお金の無駄使いをしないほうがよいからそういう候補者を落とすため、などと考えるヒトがいたら、あなたは健全な庶民で、かつ出世していな'ヒトに'ない。これは同じ業績をあげていても過去5年間に1000万円取った人と、100万円取った人がいたら、1000万円の人を採用する、と言っているのである。では今の大学でどんな人が科研費を沢山取れるのだろうか。まず地方大学や私立大学、それも教養部などで、自分なりのテーマを大切にしこしこ研究している人にはまず科研費は当たらない。まあ一度50万ぐらい当たれば良いほうだろう。地方大学でも救われる方法もある。はやりのテーマ、たとえば今なら国策である「遺伝子」の研究するのがよい。あるいは学会のボス、旧帝大（東大、京大）などの有力教授と共同研究するのもよいだろう。彼らが科研費の審査をしている。科研費の申請では過去の業績（論文）が問われるので、すぐ論文になりそうな研究をする必要もある。未知のテーマに挑戦するのが科学の醍醐味などといっているのは時代後れのロマンチストである。

わが敬愛する日本生物学会会長はもしいまこの教授選に応募したらまず間違いなく落選するだろう。彼は科研費を貰ったことがないからである。たぶん申請したこともないだろう。金沢城のヒキガエルを見に行くのにお金はいらぬ。インドネシアまでテントウムシを見に行く時は飛行機代があるだろう。飛行機代を使うのは教授にふさわしいが、歩いてカエルを見に行くのは教授とはいえない。

さてそれではなぜ20数年前は奥野良之助先生は公募の結果助教授に選考されたのだろうか。もちろん当時我々は「研究費の取得状況」など聴かなかつた。もし聴いていたら彼は落ちていただろう。神戸市須磨水族館の一飼育員であつた奥野先生が「科研費」など貰はずもない。もちろん我々も応募者に研究論文を提出して貰い、今後の研究計画や教育への抱負を尋ねた。それは現在の教授の選考とかわらない。しかし現在の教授がこれを見てどのような基準で審査するかはさっぱりわからない。我々は、20数年前教室会議で決めた（学生・院生からの要望を取り入れた）選考基準にてらして選考を行ったのである（資料2）。

今久しぶりにこの選考基準を見てみると、あらためて立派な期待される教官像にびっくりしてしまう。このような教官はいまの生物学教室に見あたらない。研究面で「業績主義的でない」「どのような問題をどのような観点から、どのような方法で発展させていくか」という問題意識をもっている」教官も滅多にいない。特に教育面で、「自分の研究を自分でしている」「学生を技術助手としてあつかわない」、という当たり前のことをしている教授、助教授は奥野先生ともう一人の助教授を除いてはいない。そんなことをしていると論文にするのが遅れて、科研費など当たらないのである。「大学内には従来の管理運営のひずみから矛盾点が多く現れていることを認め、これを意欲的に改革していこうと努める」人は皆無である。1990年代から強烈になった文部省からの「大学改革」の方針にいかに対応していくかでみんな一生懸命なのだから。かく言う筆者もこの動きのなかでいかに首にならずに生き延びるかに懸命で、大学をよりよくするどころか抵抗すらままならないのである。この辺の問題はまた次号に述べるとして教官選考の問題にもどることにしよう。

この昔の選考基準にそって、偉大な奥野先生は選ばれた。（もうひとり、あまり偉大でない人も選ばれたが・・・）。こんな選考基準がまかりとおり奥野先生のような水族館員が大学教官になったのは1970年代だったからに違いない。しかしこの基準は当時でもやや過激であったが、その後の文部省の財政誘導や科研費を梃子とする大学支配の強化の動きのなかで、ますます過激なものになった。そして、奥野先生が就任後間もない1973年9月、生物学教室の教授は次のように述べた。「教室会議を凍結する。今後は生物教室の管理運営はすべて教授だけで行う」。以来われわれは20数年間、選考基準ともども冷凍庫のなかで凍結されたまま今日に至っている（冷凍庫の中で何冊も本を書いた立派な学者もいるが・・・）。

教室会議凍結を宣言した教授達はすでに全員退官したが、その後に教授に就任した人たちにとつても、この生物学教室の教授独裁体制は居心地がよく変える気がしないらしい。そして今教授だけで、業績主義的で科研費をとって来れる人を教官に採用しようとしている。生物学教室最後の学者、奥野先生が定年を迎えられた後、どう生きていったら良いか思案にくれるこの頃である。

【資料1】最近の教授公募

金沢大学理学部生物学科自然史講座で教授1名が公募されています。

対象分野は植物自然史ですが、対象や方法は特に限定しません。ただし、本学科のハーバリウム「KANNA」を維持、発展させていただける方で、教養科目の一部も担当していただく予定です。年齢は50才以下の人を望みます。着任予定は1997年4月1日です。提出書類は、（1）履歴書1部、（2）研究業績目録（次の項目に分けて提出してください）A. 査読制度のある専門誌に印刷された論文（印刷中の論文を含む。主要論文10編以内に印を付すこと）B. 紀要その他の論文等、C. 総説・解説、D. 著書、（3）主要論文（上記）の別刷り各1部、（4）従来の研究概要（2000字程度）、（5）着任後の教育・研究計画（2000字程度）、（6）最近5年間の研究費（科研費等）取得状況、（7）応募者の研究内容等について照会できる方の住所・所属・氏名（3名まで）です。

応募の締切は9月15日（日）で、封筒の表に「教官応募書類《植物自然史》」と朱書きし、簡易書留にて郵送してください。

〔書類送付先〕920-11 金沢市角間町 金沢大学理学部生物学科長 中村浩二

【資料2】20年前の教官選考基準

研究面

選考基準

その分野についての体系づけをし、その上に研究の位置づけをしている。

イメージアップされた事柄

- I ◎その分野の体系づけをしている。
- II ◎その体系の上に自分の研究を位置づけて研究し、計画している。
◎どのような問題を、どのような観点から、どのような方法でどのように発展させて行くかという問題意識を持っている。
- III ◎批判を受ける意欲がある。
◎批判力がある。
◎その分野について議論ができる。
◎教官相互の研究の自由を認め、かつ相互批判をおこなっている。
- IV ◎上述のような研究を意欲的におこなっている。
◎業績主義でない。
◎自分の研究は自分でやる。

教育面

選考基準

個人を尊重し、生物学の研究を通してその個人を開発する。即ち、あらゆる面において学生の自主性を重んじ、学生を主体性を持った研究者とみなして教育する。

イメージアップされた事柄

- I ◎個人を尊重し、生物学の研究を通してその個人を開発する。学生を技術助手として扱わない。
- II ◎あらゆる面において学生の自主性を重んじ、学生を主体性を持った研究者とみなして教育する。
◎テーマの決定に関しては学生の主張を受け入れる。
◎研究テーマについて学生の自主的意見を尊重する。
◎学生が独自に研究できるような考え方、見方を学生との相互批判によって追究していく。
◎テーマ決定後は十分に学生と討論、助言する。
- III ◎生物学全般からながめた体系で講義し、他人の説を述べるだけでなく、自分自身の考え方を含めた内容を講義するよう努める。

管理運営面

選考基準

大学の全構成員である教官、事務職員、学生が、それぞれ管理運営に関する意見を述べる権利を認め、上述のような研究教育がおこなわれるように民主的に管理運営する。

イメージアップされた事柄

- I ◎上述のような研究教育をおこなっていく条件がみたされるように意欲的に努力する。
◎事務職員の人格が尊重され、仕事を通して幸福が求められるように努力する。
◎学生が主体性を持って学問研究ができるように努める。
◎大学内には従来の管理運営のひずみから矛盾点が多くあらわれていることを認め、これを意欲的に改革して行こうと努める。
- II ◎教官会議の全構成員は平等な立場で討論し決定していこうと努める。
◎過渡的方法として教官会議のメンバーが平等な一票を持って教室運営を行なっていくことを認める。
- III ◎教室会議での傍聴の趣旨をよく理解し、これを認める。

生物学会誌の思い出

沢田 さつき

なぜか印象に残っている投稿文

- 1 喫茶店で働きながらあまりに客がこないでその原因を追究した研究論文。なるほど身の回りのなんでも論文の材料になるんだなーと感心した。私にだって書けるはずだと思いながら1回も投稿したことがない。この原稿が初めて最後になった。《著者は君の後輩だよ。いま、東京のある出版社で、編集者になってる。校正の腕は抜群で、著者はあらゆる間違いを指摘されて往生する=会長》
- 2 皇居のそばで椎の実を拾っていて不審尋問を受けた話。世の中にはそんなことがあるんですね。私が以前、皇居の横を歩いていたらじろじろ見られてるように感じたのは気のせいではなかったのか。郷里での病院の改革の話も身近でした。この人の文章は好きです。あっ、もう読む機会はないのか。
- 3 奥野先生の脊椎動物の進化の話。自分の学生時代には奥野先生の授業は1回くらいしか聞いていない。今になって思うともったいなかった。なにしろ8時半からの1限目だったので、歩いて10分の自宅からなのに間に合わなかった。反省を込めてまじめに読みました。《あの頃の講義よりは、少しは面白くなっていると思うよ》

以上、バックナンバーにあらずに臆な記憶で書いたので、勘違いがあるかも知れませんが。

世の中、暗い話ばかりでどうせ成るようにはか成らないとあきらめたくなるんですが、奥野さんみたいな人がいると思うと私もやれるだけのことはなくてはという気になります。生物学会誌がなくなると元気づけてくれるものが1つなくなって困ります。《ぼくは、君みたいに元気なのがいるから、何かしなければと思ってただけだね》

しめっばいあのころの私から感謝の気持ちをこめて

山田和彦

日本生物学会がこれで終わりなんて、会誌がもう送られてこないなんて、奥野先生がもう退職なんて、いつも何気なしに空気のような会話をしていた近所のおじさんおばさんが、いつの間にか年をとって亡くなられたときのような感じです。《早々と殺すな=会長》

長い間ありがとうございました。月日は確実に過ぎているのですね。そういえば、少し以前に「週刊ブックレビュー」で先生の紹介がありました。そのとき画面に映った顔写真を見て、ああもう20年も過ぎたのか、と考え込みました。《どういう意味や!》

会誌は私が卒業した翌年あたりに、同級生から（九富・どうしているのかな、元気かな、おぼえているか）おしつげがましく送られてきたことを覚えております。あまり目立たなく何もしなかった私にも送ってもらえてとてもうれしく思いました。その後20年で一回しか会費を払っていないにもかかわらず、律儀に毎回送っていただきました。《ほんとにかまとめて払え》一回だけ便りを会誌に出しましたが、申し訳ないなあ、会費を払わなくてはいけないなあと思いつつも、ずるずると今まで来てしまいました。しかし毎回楽しみながら読ませていただきました。そして、いつもあのころ、そう、会誌に載っていた教室会議のごたごたしていた頃の学生時代を、しつこく考えるのです。

自分の息子が受験生になり、自分のあのころと置き換えて見つめる機会が増えてきました。会長が胃潰瘍か何かで入院されたとき、律儀にお見舞いに行ったことも覚えています。《あの時はようけきよったで》私はあのころ、若く、純真で、要領も悪く、引っ込み思案で、人見知りする、孤独で、おとなしい、未熟な、寂しい、悩み多き、つきあいの悪い、貧乏な、田舎出身の学生でした。《ようけ並べたな》下宿で昼まで寝ることと、暇つぶしに読書と映画と加賀屋座と、一人きりの散歩・・・その程度の毎日でした。

なぜそんなにごたごたともめるのか、周囲の人々には理解できていたでしょうが、あのときの私にはあまりよく理解できませんでした。“それはそれとしても、もっとしっかり専門的な勉強を指導してくれ”と心の中では叫んでいました。大学というところはもっと自分の学びたいところを専門的に指導してもらえるものだとばかり思っていたのです。そのためではありませんが、冬休みに十二指腸潰瘍が悪化して2週間ほど入院しました。私は、それほど一生懸命受験勉強をしてあこがれの金沢大学に合格していたのです。まともな講義も指導もしないのに留年とはあんまりだ、とも思いました（卒業したくない者も多かったようですが）。《そう言えば、九富は長いこと、沈殿してたなあ》私は何年も学生を続けられるほど経済的に豊かではありませんでしたので、すべてについて中途半端でわけも分かりませんでした。がさっさと卒業してしまいました。

したがって私にとっての金沢は、もし自分の講座のS先生と生物学会誌との出会いがなかったら、まったく得ることのない空白の4年間で終わってしまっていたと思います。

あの空白の4年間の代償という訳でもないでしょうが、卒業して21年間も指導していただいたり、会費も払わないのに会誌を送って勉強させていただけるなんて・・・。《生物学会誌で勉強できるのかなあ=7局長。マンガでも勉強できるやないか=会長》嬉しい限りです。そのうえ会費も払わないのに、《あんまり「払わん払わん」言うなよ。ちゃんと払ってる人に悪いやないか》礼状さえ出してないのに、2冊か3冊か本まで送っていただきました。《それは君の勘違いだよ。全会員に贈ったのは『ヒキガエル』だけだよ》（『磯魚の生態学』だけは自分で買ったような気がします。）

いまになって思えば、あのころ、高校時代のように何の疑問も持たないまま知識を教え込まれなくて良かったような気がします。そして、本来大学自体にあまり期待をしてはいけないということがやっとわかったのです。勉強は卒業してからも指導してもらえ、それをもとに自分でいくらでもできたのですから。あれはあれで良かったのだと思うよう

になりました。どさくさとした生物学教室とこの会誌からは知識以上のことを学ばせていただいたような気がします。先日の授業でそのような話をしたら、寝ていた生徒もぼつちり目を覚ました。

あのころの人々、自分とは違ってまぶしいばかりに輝いていた諸先輩方や同期生、どうしているのでしょうか。《けっこう出世した奴もいるよ》（私は松江に住みながら残念なことに栗岡さんとも面識がありませんし、《良かったね。面識がなくて》当時の人々ともつきあいがいいのです。）そして、何の疑問も持たない受験生を相手に、勉強嫌いを逆につくり続けているのではないかと思いつつも、何もできぬままに、毎日重い気分で生物の入試問題を解かせている、つき合いにくく、いつも少し斜めの40代高校教師、あのころのままの私……。《「斜め」ってのがいいね。まっすぐ立つとロクなことはない》もう脱皮は難しいかなと、21年を経て悩みは尽きません。会費を一回しか払わなかったお詫びとしてバックナンバーをすべていただきます。もう一度最初から読み返して再度挑戦してみたいと思います。《それはやめた方がいいと思うけどなあ=7局長。おれもそう思う=6局長》

最後になりましたが、停年退職すると暇になり、張り合いがなくなってぼけたり病気になったりする例が多いと聞いています。《最初には殺しておいて、最後はぼけさせるつもりか》（いらぬ世話だといわれるでしょうね）特に教職に就いていた人が多いとのこと。《じゃ、会長は大丈夫ですね=7局長。どうしてや?=会長。だって、会長は「教職」になんか就いていたことないでしょう》そのまま会長で生物学会Ver. 2に進化させて暇をつぶしていただくことができませんでしょうか。強く希望します。金沢でのあのころの何かをまだ忘れたくないのです。会費はきちんと払いますからよろしくお願いします。《無理なことを言うなよ=会長》

何を求めるか？

遊 興 人

答えなどない。しかし、本心で求めれば、それはある。

何はともあれ課程を終了して後、引っ掛けられた（自ら引っ掛かったという説もある）団体に閉じこめられて約十年。後先のことなどまったく考えず、やっと脱出することができた。

脱出したのが5月31日付けだから、もうすぐ半年かな？ 今は、遊興にふけている。

つい、先達って、とりあえずの【というのは、人生経験から言えば、彼らの方がずっと先を行っている】後輩たち、そしてその他と会って話を聞く機会があった。その中には、筋違いの恩師【本人は、きっと、オレはおまえを教え子にしたつもりはないと言うかもしれないが】がいて、彼の言動にちょっとばかり共感してしまった。彼は、臆面もなく、「1君、オレは君の生き方に憧れとるからナ」と言うのである。言われた本人たちは、年寄りの冷や水などと茶化していたが、聞いていた僕は、ややびっくり。自分の信じる通りに生きてきたと僕には思えてた人から、この言葉。カエルにかこつけて、そんな話を本に書いたのは、別の意味があると思っていたのだが。でも、そんなもんかもしれない。おそらく、そんな気持ちを持つ彼が、自分の信ずる研究をしようとしてきたことは確かだろうが、やはり、満たされないものがあつたのだろう。僕も、脱出に成功して、1君のように旅に出ようかとも思ったけど。でも、本質的に旅が好きではない【嫌いでもないが】僕は、ほかのを選んでしまった。別に、そうだからといって僕は後悔しているわけでもないが。1君に憧れた彼には、1君のようなことができるチャンスがもうすぐやってくる。はたして、そうするだろうか？ 彼が、何を求めるかによってそれは決まるだろう（1996年11月5日午前2時）

閑話休題。某独裁会長の主催する学会の事務局に出入りする方、あるいはその周辺の方にも時代の波が押し寄せ、インターネットしてらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。かく言う筆者も、浮き世離れした所から世間に戻ってきて、ちょっとだけインターネットで遊びました。でも、今は、アウトです。なぜなら、今、筆者はルンペンだからです。と言っても、寝てばかりいるわけではありません。

いいオジさんが、と自分でも思いつつ、電子空間に引き込まれている。主に、いわゆる Windows NT / MS-DOS というオペレーティングシステムの上で C / C++ プログラミングにハマっているのだけれど、やっていてフと思うことがある。世の中、どんどんブラックボックスが多くなっていくなあって。

筆者が C++ を選んだ理由は、UNIX, OS/2, Windows / MS-DOS 等、多様な OS 上で走る言語・コンパイラであることだった。筆者は、UNIX の世界は知らないが、MS-DOS においては、PC ユーザーは解説本頼りにでもアセンブラ経由で直接マシンとやり取りできると思うし、場合によっては C から直接お付き合いできることになっていると考えて間違いないと思う（これは、筆者が自由自在に扱っているじょうい意味ではありません、念のため）。ライブラリ関数の数もたかが知れていて、三角関数の値を求めるとか、OS やマシンのどの機能に対応するかということは比較的把握しやすい。

ところが、Windows となると、そうはいかない。詳細な議論は省きますが（PC プログラミングに少しでも興味をお持ちの諸氏には、あのことが、今さら何をとお思いでしょうか）、Windows プログラミングで用いられる C / C++ の最も基本的かつ重要な概念は、クラスとオブジェクトです。これによって、コードにして何十行、何百行にもなるようなデータを数行で表し、その挙動さえも規定することができるようになっています。場合によっては、誰かを興奮させそうなポリモーフィズムさえ持ち得ます。

原則として、ユーザーであるプログラマがクラスやオブジェクトというものを定義できるのですが、Windows がともあれ世に受け入れられた理由の一つとなっている共通の（つまり標準となる）グラフィカルなユーザインターフェイスというものがここで幅を効かせています。つまり、標準を実現するためには、共通のクラス・オブジェクトを定義する必要があり、それがC/C++のメーカーから提供されているわけです。

筆者の使っているMicrosoft Visual C++では、MFC (Microsoft Foundation Class Library) という形で定義され、かつそれを使用することが原則となっています。しかし、この量が生半可ではない。ハードディスク上に数10MB、オンラインヘルプをいれたら100MBは軽く越えていくようなコードや文書を通読できる人なんているわけがありません（なかには、いるだろうか?）。このオブジェクトにこういうメソッドを使えば、こういう結果を出してくれる、ということさえわかれば、中身を見なくてもとにかくできてしまう。実はそれをするだけでも大変なんだけど。

かくして、全部ではないにしても、かなりの部分はブラックボックス的にコードが書かれてしまうというワケ。便利といえば便利なのだが、標準で用意されるクラスライブラリ、実は、メーカーごとに異なっている。だから、移植性が問題になってくる。それと、もうひとつ問題なのは公開性である。そして、ユーザの自由度である。

これらの問題については横においておくとしても、皮肉な現象と思うのは筆者だけなのだろうか? IBM-PC互換機が成功したのは、オープン性であり、オープンなものを標準にしたからだということをPCユーザは知っているでしょう。おかげで、国民機と言われた機種よりも安い価格で、より高い機能性を手にし、ユーザ数も増えました。多くの人にとって、遊びや仕事の標準の環境を提供するようになったPCやソフトウェアであるのに、それらについてはブラックボックス化が急激に進んでしまいました。多くのユーザにとってはそうだと思います。筆者にとってもそうなんです。

筆者のような遊興人は別にしても、多くのユーザはそれぞれの実務で忙しく、OSの論理的構造やハードウェアとの関係なんてかまっていられません。それが当たり前です。でも、だからといって、ブラックボックスの中は見れなくても良いということにはなりません。見たい時には、いつでも、心ゆくまで見れるようにして置くことが必要だと思います。見ることは理解につながる可能性を秘めていますし、理解したことをもとにしてユーザもPCやソフトウェアを使うでしょう。それは、一部の人間だけがブラックボックスの中を知ることができるという状況よりはずっと良いのではないのでしょうか。その一部の人間の意図に振り回されてPCを使うなんて状況は可能な限り避けたいとは思いませんか? それでなくても、皆さんの多くは、上司や指導教官の言うことを理解するだけでも忙しい日々ではありませんか。（1996年11月14日午前3時）

筆者の好みかもしれないが、ブラックボックスとして使うことは良いこととしても、その中身が公開されていないとどうも気持ちが悪い。世の中には、表面的にきれいであれば、中身を問うなという風潮がまかり通るところがある。

薬害エイズ問題にしてもそうだろう。非加熱製剤が開発された当初は、血友病患者にとっては福音であったが、エイズの出現でそうではなくなった。非加熱製剤の使用によってHIV感染が発生することを立証するために、患者に非加熱製剤を投与してデータを得ようとしたり、データで確認されるまでは非加熱製剤を投与するなどということがどうして科学者・研究者としての態度であるのだろう。仮に、科学者・研究者としてそのような行動が正当であるとしても、医療を受ける側の市民からみれば、そのような研究者の世界は狂っているとしか思えない。なぜなら、自分たちを死に追いやるようなことがなぜともなのだろう。

新聞やテレビでも報道されたことだが、非加熱製剤の使用を強行していた某教授に、医局員がその危険性を指摘すると、某教授は、その医局員の人生をつぶすようなことを言って恫喝したという。権力を持ち、その権力を行使することでアイデンティティを保持する

人間にとって、自分たちが依拠していた業績を覆す科学的知見は無用化、あるいは無視すべきものと移るのかもしれない。それに意義を唱える人間は、おそらく、そのような権力社会では徹底的にイジメられ、極端な言い方をすれば表に出ない形で弾圧さされたかもしれない。なぜなら、自分たちを権力者集団に持ち上げるために最も必要な科学的な衣装をはぎとれ、ということになるからである。

自分の眼で確かめ、自分で考えるということは、誰もが当たり前のように思い、実行していると考えがちだが、案外そうではない。それがわかるのは、自分が信じていたことと相反する事実を突きつけられた時である。そのとき、その人のパーソナリティが現れる。無視する。突きつけた人間を憎悪し、敵視する。確かめる。自分の見解を改める。筆者の経験では、大体この4つのパターンがあると思うのだが、前二者、後二者はそれぞれ重複しやすい。前二者のパターンを持つ人は、後二者の性格を持ち合わせることはまずない。筆者が十年ほどいた職場には、このような人しかいなかった。後二者のパターンに入る人は、実は前二者の感覚も持つのが普通だろう。そして、その場合、その人はかなり苦しむはずである。そして苦しむ人こそが、正直なんだと思う。

どのような人間も、自分が生きてきた環境、教育、出会った人々からの影響は逃れることができないし、現在の考え方・生き方も自分自身の歴史に規定されているだろう。過去を変えられない以上、そのような自分の枠組を変えるということはかなり困難なことである。でも、それを意識することは必要な気もする。今まで、気付かなかった世界を知るチャンスも出てくるし、あるいは自分のやってきたことをよりよくする機会も生まれるかもしれない。人それぞれに、そのような機会を育てることが自由であると思うし、そのような芽を摘み取ってはいけないと思うのだが。

ここで、また、話しは元に戻ってくるのだが、ブラックボックス的に使っているPCも、人間にとっては、環境である。知らぬうちに、使っているPCにおけるユーザインターフェイスがユーザであるわれわれの生き方や思考に影響を与え、あるいはわれわれを規定してもいるだろう。それを、意識しておくことは必要だと思う。PCと向き合っている時だけが、個人の持ち合わせる世界のすべてではないし、何よりも、PCに振り回されないようにするために。これは、OS、ハードウェア、プログラミングに興味を持つ人だけでなく、アプリケーションユーザも同じだと僕は思うのだが。

興味のない人から見れば、科学的知識というのはブラックボックス的な部分が多いし、それも仕方がないことだろう。でも、たとえ今まで素人であっても、必要ならば持てる能力でその知識を得、理解しようとするし、それによって自分の判断をし、行動するというのは誰にとってもふつうのことではないだろうか。そのようなふつうのことが、ふつうになるためには、公開性というのが大事なことだとは思っている。ただ、これに付け加えてプライバシーの保護をお忘れなく。

この拙文、実は、独裁会長の本に出てくるイワナの彼と話している時に、本学会の記念誌に原稿を書けと言われて書きました。今の自分の考えをまとめてみるのも、イイかなと思ったのと、本音で生きる彼が言ったことの重みに耐えかねたのが理由です。だから、この拙文は、イワナの彼に献呈したいと思います。本人は嫌がるだろうけど。(1996年11月14日午後1時)

アミッズ (AMIDS)

半仙半魚

本誌43号に、「アミッズ=後天性精神免疫不全症候群」という【生物学語大辞典】の解説記事が載っていた。みなさん忘れていたろうから、全文引用しておく。

エイズ(AIDS)=後天性免疫不全症候群なる病気が世界中で猛威を振るっている。日本にも、厚生省の努力によって上陸してしまった。しかし、考えようによってはもっと恐い、類似の病気が、特に日本の若者の間に蔓延していることは、案外知られていない。それがアミッズ=後天性精神免疫不全症候群である。

人間の身体を構成する蛋白質は、個人によってみな違う。人はみな「自分の」蛋白質を持っているのである。そして、自分と違う他人の蛋白質が入ってくると、たちまち見分け、攻撃して体外に追い出そうとする。これが免疫作用と言われる働きであるエイズウイルスはこの免疫機能を低下させる。他人の蛋白も受け入れてしまうので、あらゆる病原体に無防備になり、感染をくり返して死にいたる。

ところで、人間には、清新にも免疫機能が備わっている。自分の考え方と違う本を読めばいらいらして腹が立ち、しまいにはその本を投げ捨てる。講義を聴いていても「あいつ、どついたらるか」などと思う。これが精神免疫作用である。しかし最近、この精神免疫機能が非常に弱い学生が増えてきた。学生は、ありとあらゆる講義をすべて取り込んですましている。いらいらもせず、怒りもしないのである。これは、しかし、アミッズウイルスの感染によるものではないらしい。彼らは元もと、自分自身の精神的「蛋白質」を持っていないらしいのである。もしそうなら、いかなる異質の精神的蛋白質が侵入してきても、免疫反応は起こるはずはない。異質が同か、見分けることができなからである。

若者から精神免疫がなくなればどうなるか。もしヒトラーが現れて、右向けー右っ!と言えば、なんの抵抗もなく全員右を向いてしまうだろう。日本の将来には、暗雲がただよっている。

でも、救いが一つある。この病気の感染率は、東大、京大など一流大学でもっとも高い。二流、三流大学になるほど低下している。高校卒で就職している若者にはほとんど感染していない。茶髪に染めてバイクを飛ばしている若者は、この病気とは無縁である。一流大学の成れの果て、大蔵、厚生のお役人の行動がそれを証明している。

後天性精神免疫「過敏」症候群のみなさん、大いに怒ろうではないか。

若い頃にこの病気にかかり、今も後遺症が少し残っている(仕事に対する意欲に欠ける)私としては、この記事だけでは不満なので、私なりにさらにくわしい考察を加えてみようと思う。

この病気の原型は、私の生きてきた50年の間に(その前にもあっただろうが)3回の流行があったように思う。その間に、ウイルスだけに、それぞれ型を変えて今も生きつづけているようだ。

第1期は、感染時期はわかりにくいだが流行の終わったのが終戦の時で、これを仮に1型とする。次は60~70年代に流行ったもので、これが2型(A)、そして現存しているのは2型(B)である。2型(A)と2型(B)は連続していて、2型(A)は2型(B)の親から子供に直接感染したものと思われる。

1型は、日本中の国民のほとんどがかかり、症状としてはあの軍国主義であり、終戦と同時に多くの人々にその抗体ができ、そのため60年代ごろまでその流行はカゲをひそめて

きた。しかし、この1型に対する予防の点で、原因・治療を国家があいまいにして（1億総ざんげ、あるいはあの戦争はそれなりの意義があった等、主に日本の支配層の人々がその犯人）きた1型患者によって、2型が形を変えて現われてきた。

それでも1型の特徴は、その多くの患者に、自分で言分自身が感染者であったというしっかりした自覚があったという点である。私の勝手な診断で悪いが、当会長も1型感染者だったと思う。当会長が私達と最初に会った時に、「私も軍国少年であった。それ故に、国やエライ人の話には疑ってかかる」と言った。1型にかかった人々の中には、こういう考え方の人が沢山今もいることは、私の年代（50台）の者は直接会って知っている。そうゆう人々がまだガンバツていて、その後現在につづく2型（A）2型（B）に必死で抵抗している。そうでなければ今ごろは、私もふくめて日本中にこのウィルスがいつそう蔓延していたにちがいない。私なども2型（A）に感染したけれど、これらの人々の助言によってそれなりに立ち直る事ができたように思っている。

それならば、私も感染した2型なるものがどの様なものであったかと言えば、1型と大きな違いは1型のように多数の死者（戦争による）が出なかった故に、感染したという自覚がなく、その結果今日の2型（A）から2型（B）への大流行につながったと思う。

1型、2型ともにその原因は「戦争」にある。ただ2型は直接生命に関係のない受験戦争であった。戦後まもない頃（私の生まれた頃）は、人々は自分の食うものさえも自分たちの力で調達し、国や金持ちだった人を当てにできない時代であった。しかし国や支配層の人々は虎視眈眈、国をどの方向へ導かなければならないか、また、戦争中うまい汁を吸った支配層は新たな金もつけを必死に模索していた。それが60年代になり、国が経済的に少々見通しがついてくると、じわじわと一般国民にウィルスをまきはじめた。ひもじかった社会（はっきりとは覚えていないが）の中で、経済優先、経済的に豊かな社会をめざし、そのため資源のない日本は技術をもって諸国との競争に打ち勝つ競争社会にしようとした。その結果、他人との競争に打ち勝って、いい高校、いい大学への受験競争が奨励され、国（文部省）が次々と手を打ってきたのである。

ただ、前にも言った様に、60年代70年代にはまだ1型に感染した人々がガンバツていて、安保反対や全国学園紛争など、外見上は必死に2型（A）ウィルスと戦っている風に見えた。しかし、である。その実もう2型ウィルスが高校、大学の若者に蔓延していたのである。私も感染者の一人だった。

ここで少々私のデタラメな医学の話になるが、そもそも人間の脳というものは、使えば使うほどよいというのはまちがいであろう。何でも頭につめこめばいいというものでは決していない。聖徳太子は7人だか8人だかの話を聞いてそれに全部対処したというが、どうせ「あいつの話ならいつもの話か」という具合で、6人の話は適当に聞いていたにちがいない。人間の脳にそんなに差があるとは思われない。

同じ物を見ても、また同じ音を聞いても、それぞれ個人によって異なってくるのである。そこに個人の好き・きらいの選択は入ってくる。特に若い頃には毎日のように経験していない情報がいくつも入ってきて、それを選択している時に、心地よいものはずっと頭に入り（残り）、いやなものは入りにくいという事である（特別いやなものはまた、別の理由で入って残るが）。

この二つの関係は左右の脳の働き（バランス）で成り立っていると思う。この入ってくる情報が、受け手にとって心地よいものであるという認識のないものであれば、それは時間のムダでしかない。私などはよく子供の頃授業中に「何をぼさっとしている」と先生にしかられた。しかしその当時野鳥に興味があったので授業中じっと耳をすませていただけの事だったし、あるいは近くの席に好きな女の子がいたのをじっと観察していたのであって、決して「ぼさっとしていた」訳ではない。「なんでこんな勉強して、頭の中につめ込むのか」「なんでテストの成績がいいというだけで、いかに個人の評価の大多数をしめていくか」私の高校時代、私も含めて（特に成績のよくない人）は疑問に思った。

人間の脳とは本当にうまくできていると思う。いやな事、迷っている事はすんなり受け

入れない様にうまい具合に働く。ただその場合、周廻がくり返し「それでいいのだ」「迷う事はダメなことだ」「言われた通りにしろ」とアメとムチでせまられた場合、これも人間のうまくできた所で、自分の身をまもるため、むりやりに頭の中にインプットされる。しかしこれが脳をダメにしてしまう。それが続くと豊かな感性を持っていたはずの右の脳をダメにしてしまうのである。また逆に「お前はダメな奴」「お前は人間のクズ」という最もイヤな自分を否定されるような言葉は、一度インプットされるとなかなか頭から消えないし、先ほど言った右の脳の発達も止めてしまう。すなわち、脳のバランスがくずれてしまうのである。

私自身の話にもどるが、高三の時に受験に失敗し（本人も当然の結果として受け入れたが）、1年間浪人生活をした。その時予備校の先輩達から浪人生活で守るべき事を聞かされた。

1・異性に興味を持つな。2・ギャンブルはするな。3・不得意（きらいな）課目を徹底的にやれ。4・周りの受験生はみんな敵と思え。5・これらを守ればその先には君のバラ色の人生が待っている。

この通りにやれたかどうか疑わしいが、またこの言葉をきもに銘じてやったせいいかどうかも疑わしいが、浪人1年で大学に合格した。受験戦争なるものは多少の差はあれこの様なものであると思う。（もっとも、今頃はこんな事を他人に言われなくとも、高校生はもう自覚している。右の脳が完全にウイルスによって汚染されているのだろう）

しかしその結果、私は大学へ入ってから迷ったのである。

外見上はりっぱな大学生ではあったが、ウイルスにもう汚染されていた。しかし人間というものはどこかで自分で自分の体を直そうとするものらしい。また年齢に応じた（自分に応じた）ものをとり返そうとするらしい（私の場合単に遊びたいだけだったかも）。予備校で禁止されていた事というのは、若者には最も興味のある事である。しかし受験勉強と違って何処にもマニュアルなるものがない。そこではたと困ってしまった。予備校では統一された答をより早くより正確に、好ききらいに関係なく、相手の要求にだけ答を出す、その事に迷いもせず、そのシステムに適合したものが勝者である。まさにAMIDSの立派な患者になっていたのである。

失敗と迷いの連続、さらに悪い事に、大学生らしさという、もともと学問をめざして大学に来たのではないのに、他人はごまかせても自分はごまかせないと知りつつも、周廻を気にする体質を身につけたため、何をしたいのかわからなくなった。「ヤル気のない人間」状態になったのである。しかし私にとって幸運(?)な事は、当時大学紛争なるものの中で(生物学科の中にも一部起こっていた)、「お前のムジュン、迷いは当然」という考え方を耳にする事ができた事である。もっとも、そういう言葉を耳にしながらも結果を見ると、極端にムジュンした事を頭につめこんでは生きていけないものらしい。また、今日になってわかった事だが、どうも私には「なるべく楽をして生きていく」というDNAを父親からさずかっているらしく、いくら時間がかかっても自分に合わないものは捨てていかなければならないことに気がついた。そこで、周廻の状況(外因)に対しても、自分自身の内因に対しても、十分時間をかけて戦っていこう、そしてそれができるメドがみついたら大学をやめよう、と決心した。

ところが、結局大学に8年間居座ることになった(そんな事に8年間も国民の税金を使ったのか、としかられそう)。考えてみれば、病気がかかっていた中学高校の年数と同じくらい、病気を直すのにかかってしまったと言うわけである。弁解ではないが、受験体制で植えつけられた根は、決して浅いものではない(他人から見れば、ムダな時間と言うかもしれないが)。

話はまた横道にそれるが、大学・文部省は最近教養部を廃止して、そのムダな時間(ヒマ)をなくしてしまったという。この病気のこわさを全然認識していないようだ。

ここで、今も私の生き方に少なからず影響を与えているあの生物学科闘争の事を書かなければいけないのだが、当学会誌最終号にはたぶんこの事に関する原稿が沢山来る(「原

稿募集”のおどしがきいて?) だろうから、それは省略するでしょう。ただ私その過程で得たもの、感じたものは、こんなことである。たとえ大学教授であろうが学部長であろうが、どんなエライ人(?) であろうが、何十年間生きてきた人なら、何十年間分の財産しかもち合わせていない。逆に何十年間生きてきたエライくない人(?) でも、視点を変えれば何十年間分の大きな財産を持っているという事である。また、それと同時に、人は社会的地位のちがい、あるいは年齢的ちがいによるそれぞれの苦しみを、お互いになかなか理解できない、わからないという事も知った。簡単に言えば、人間すべてに万能な人はいないし、またエライ人はそうでない人の気持ちをわからない(会長の言う、魚の事は漁師に聞いてくれ、わしは知らん、人間エライなるとダメになる) という事なのだろう。

私の仕事場である山の中は、周りほとんどが農家である。もちろん専業農家ではなく、他と同じように、主に農業をやっているのは年寄りだけである。明るいうちに家にいるのはおじいちゃん、おばあちゃんだけで、時々ヒマがあるとヒマな私の所へ遊びに来る。実は私は、このお百姓さん達があまり好きではなかった。というのは、この小さな集落でお互い仲がよいのか、悪いのかわからないからである。よく仲間内で個人のわる口を言う。しかし村ではよくまとまっていて、お互い助け合っている。これらのおじいちゃんと話をしているうちに、この頃やっと、なぜそうなのか少しわかったように思う。

私の仕事場へくるおじいちゃんは、百姓という名の通り、どんなことでも自分でこなしている。それで感心して話を聞くと、昔(50年ほど前の話が多い) はほとんどのものを自給自足でやっていたので、わしのやるくらいはみんな(他の人) もやっていたという。ところが、その中にはやはり得手不得手があり、米を作らせたなら誰々が一番、野菜(その中でもキュウリ・トマト・・・) 作りは誰々、炭を焼かせたら誰々、山菜を採らせたなら誰々、猟師をやらせたなら誰々が一番だった、と言う。あいつは村一番の力持ちだった、誰々は野良仕事は遅かったがワラジやカンジキを作らせたらずばらしいものを作った、誰々は仕事は早いけどどうも雑な所があった、誰々は農業はきらいだったが機械いじりが好きでよく機械を直してもらった・・・。つまり各人に得手不得手があり、トータルして誰が一番優れていた、という話にはならないのである。また得手不得手はみんなが自覚しており、お互いその人の助けを必要としていることをよく知っていたように思う。

考えてみればそんな「百姓」がいなくなってきたのはごく最近である。江戸時代以来実に長い間、彼らの祖先はそうのように活躍し、その遺伝子を受けついで来た人々なのである。私の小学校の頃同級生はほとんどが農家の子であり、学校には田んぼが1枚あった。その田んぼで稲を子供だけで作るのであるが、私は農家の子供ではなかったので、田植えや稲刈りの時に、日頃ボーツといっている農家の子供のその手際のよさに「あ然」とさせられたのを、今でもはっきり覚えている。

現代社会は、社会の要求した事にしかたなくしたがって仕事をしているだけで(私も含めて)、そんなことでは人間の本当の能力なんて簡単にはわからないものだと思う。(人の上に立つ指導者はせめて、わからないという事がわかっていれば、わからないなりにわかり合えると思うが・・・わかるかな?)

またまた話が横道にそれてしまった。私の話はそれくらいにして、2型AMIDSについて広く考えてみよう。

60年代は、これまで書いてきた様に、1型感染の人達が努力して感染を食い止めようとしていたが、いかんせん、国、文部省の政策で、かんじんの病気にかかっていた学生達に自覚症状がなかった。その自覚症状のない感染者が、さらに他の人を国・文部省の手からそ助け出そうという、奇妙な運動になってしまった。

70年代になると、自分たちがもっとも病んだ人間であるという見方が出てきて、大学解体とか自己否定などということが叫ばれ出したのだが、東大闘争のように最も重症であった学生が、果たして自分の病状にどれほど気づいていたか、私には疑問である。というのは、当時、彼らが大学を本当に解体できるとは、とうてい私には思えなかったからである。それでも、あれほど大学(東大)解体を叫んでいたのだから、それなら20年経って自

分たちが子供の親となり、エリートとして社会の第一線に立った時、この病気の治療に少しは真剣に戦っているだろう、という期待は、見事に裏切られてしまった。おそらくこの病気を治療する事によって、自分が築いてきた社会的地位を失うより、そんなムリをして直さなくてももっといい薬がある（金、地位、名誉という薬）という事を かしこい彼らなら知ったと思う。それに戦争（受験戦争）には敗者がいれば当然勝者もいる。共にいつも最も被害を被るのは弱い人達（現状に適合しにくい人間）であり、東大生（大学生）はすでに勝者であって、競争に勝って将来が約束されている人間である事を、社会に出てすぐに知ったからにちがいない。

ウィルス病というものは、いい治療法がない場合、ただ一つ有効な方法がある。それは悩んだり迷ったりして、体力を消耗しない事が何よりも大切なのである。このように70年代この病気にかかり発病しそうになった彼らは、なるべく迷う事悩む事なく体力を維持する方法をとって、地位・名誉・金が手にいる希望を持ち、それらを取得していったのである。この時点で、2型Bが深く日本中に潜航しはじめたにちがいない。

それでは2型Bは、いつ頃からその症状が現われるのであろうか。これは我が家の娘の、クラス雑誌に載った文章である。

宿題をしなかったのは

月曜日、宿題を忘れた。遠足のことで頭がいっぱい。明日、2日分しよう。（これがしっぱい。）

火曜日。遠足でつかれて、やらなかった。学校でしよう。（どンドン、たまっていく）

水曜日。学校で、2日分書く。3日分書けなかったので、先生におこられると思ひ、出さなかった。ほうかごは、代表委員会のことで、いっぱい。

木曜日。4限で、あまり時間がなく、ほうかごは、社会の資料集めに行っていた。社会でいっぱい。

土曜日。残って書く。

今週は、一度も心の詩を出さなかった。（前にも言われた。）

「明日、2日分書こう」というのが、ダメなんだな。毎日、ちゃんと書いておかなくては、ダメなんだな。《親父より文章うまいね=会長》

この文章を見た限りでは、かろうじてではあるがまだ感染しているとは思われない。自分の脳が自分の価値なるものに対して、それを受け入れ、明日に対して楽しいイメージが書かれている。（子供に対して、「よく遊び、よく学ぶ」という、できもしない事を言う大人がいて困る。）

ところが中高校生になったらどうだろうか。私の仕事場は先程も書いていた様に山の中にあり、オリエンテーリングなるもののコースの途中にある。いつその事だったか、中高生らしき一団がそのオリエンテーリングの最中に、道路ワキにみんな座って休んでいた。後から来た若い教師にしかられしびしび歩き出したが、その教師も笑いながら注意していた程度だったので、こちらも気楽に「こんな山の中まで来て命令しなくても、自由にさせたら」と言ったら「そんな事をこちらがしたら、宿舎でみんな家から持ってきたファミコンやゲーム機で遊んでいて、だれも外など出ていかない」と言う。

こうなるともう楽しい遠足のイメージなど生徒には描けていない。自分が行動したいのではなく、しなくてはいけないという命令で行動しているのである。同じ遠足でも、一方は右の脳を使い、他方は左の脳を使っていないのである。

このAMIDSという病気には「後天性」という字がついている。50年前、私の生まれた頃の赤子と現代の赤子との体力や栄養状態を比べてみると、現代のほうはるかにいいのだから、赤子の間に感染したはずはない。それならばやはり、一般的には中学生の頃に（所によっては小学校にもひどい所があるが）感染してくると思われる。中学生になると、

親、国（文部省）、あらゆる周囲から、ウイルスを集中的にまき散らされるからである。テストの結果をいっせいに発表し、競争であからさまに優劣をつけ、高校受験（戦争）の準備を押しつけていながら、一方では人間の価値は勉強のみではないなどと言いつつ、他の価値はすべてその下に置いてある、この相反する二つの考え方が頭に入ってくると、不器用な大人だって「イラつく」し「ムカつく」だろう。これが「いじめ」などの諸々の発病となって現われる。

中学生にもなれば、仲間同士仲良くしなければいけないという事ぐらい、知識として習っている。しかしこれはたんなる知識であって、意識として認識するには仲良しのいい例をたくさん見て、体験して感じ取らなければ、意識にはならない（「意識とははっきりした知覚」国語辞典）。実際の学校では、生徒は仲良くすると正反対の事（個人の優劣を競う）が目目の前の現実として日常茶飯時に起こっていて、この競争に勝つために、自分より優秀な奴、自分よりダメな奴を区別し、その実際に見て感じた意識こそが頭の中にはっきりと根づく。そこから各自の行動が起きてくるのである。

この様な競争社会の教育制度をさらに進めていったのは、2型Aに感染した大人達である。彼らがとった態度は、このウイルスなるものが社会的背景（国家・文部省）のもとに出てきたものであるならば、感染する事やむなし、とし、そのウイルスと共存できるような体制に自ら積極的にかわかり、発病する事を押さえる方法を考えていった。早くから子供達を隔離し、迷い疑う事のないよう適切な指示を与え、競争の中での勝者になれるよう幼い頃から訓練してきた。しかし、ここに大きな問題（あたりまえの問題）が起きてきた。競争には勝者がいれば敗者ができる。全員が勝者になるわけではない。その上、敗者のほうが正しい事を発言する機会が多いのである。受験の敗者も運動会の敗者もそれほど変りない、などというような簡単なものではない。

70年代には、まだこの正論をいう敗者に対して周囲があたたかい目で見ると余裕があったし、「大学が何ぼのもんじゃ」という覚めた見方もあった。と同時に、勝者となった人達の中にも、そのマイナスとなる点を真剣に語る人達もいた。ところが現在の状況、すなわち、2型ウイルスの特徴である周囲の環境とうまい具合にマッチして生きていくという性質、コンピューターの様に表示された事をより早くより正確に行ない、そして一切文句を言わないという状況の下では、それに適合できない敗者の正しい言葉は、今や負け犬の遠吠えほどの評価になってしまっている。いや、負け犬の遠吠えにしなくてはいけないのである。なぜなら、自分達（勝者）は、やりたくない事でもガマンして今の地位にあるのであって、競争に負けたものが楽しくあってはいけないのである。

この70年代から現代にいたるA型からB型へのいっそう過酷になった競争社会の中で、いじめ、登校拒否、自殺等の諸問題が必然的に起きてきたのではないだろうか。

以上思いつくままにAMDISの話を書きだしてきただけで、もしも順調だと思ってきた自分の人生に疑問を持った人がいたら、ゆっくり悩んでください。じつは私の立場としては、競争社会で勝者になっている人の事などどうでもいい事なのです。問題は敗者としての私（主観的にも客観的にも）が、それでは、今まで何ができてきたか、そして今後何ができるかという事である。正直な所何もしてこなかったかもしれない。こじつけて言えば、自分に合った、少々他人とはちがった価値感（と他人が言っている）で、これまでやってきたことぐらいかもしれない。

ただその中で、低額所得者、第1次産業（魚屋）として、社会がそういう人々をどの様に見ているかという事を、幾分かは知り得たと思う（やはり人間というものはその立場に立たなければわからない）。しかしそうは言うものの、明日食う銭もないほど苦労した訳でもなく、それなりの学歴もあり《金沢大学大学院修士コース4年中退だものね》、いずれも中途半端なままできている。それが反映したのか、この原稿を書いている横で、クラス最下位の成績に甘んじている（しかレクラス会長）ムスコや、高校を出てすでに2度も仕事をクビになったムスメが大口を開けてテレビを見て笑っているのを見るにつけ、将来

の道を自分で切り開いていけるか心配しているのである。

おそらく60年代、あるいは70年代に、人間どの様に生きていくべきか、真剣に論じていたのに（今でもあるだろうが）《あんまりないよ》、その後何の社会的変化もなかったのは、おそらく、どこにでもある（我が家にもある）、経済的にしっかりして社会的に認められる人に我が子を育てたい、という現実（願望）にぶちあたった時の選択によるものだと思う。私が変わらない以上に（私が何もしてこなかった以上に）あの当時から世の中何も変わっていない。いやむしろ悪くなっている様に思える。経済的発展にともなう負の要因として、教育はもちろん、環境問題、政治の不信、日本人の働き過ぎ、等々ますます悪化している。改善されたのは、強いて言えば寿命が延びたぐらいだろう。しかしそれとても、年寄りが増えればお金がかかる。お金のない年寄りはこの先ジャマもの扱いされそうな気配である。そうした中で落ちこぼれていった若者もいただろうし、私のムスメの様に、転校生、勉強ができない、動作がにぶい、といったことでいじめられ、登校拒否せざるを得なくなる弱者が、以前にも増して多くなっているだろう。そうゆうのを見るにつけ聞くにつけ、もっと楽しいいろんな事が、タメの烙印を押され落ちこぼれと言われる若者にも、あっていいはずだと思う。またそうゆう人達の声が反映される社会こそマトモな社会だと思うのだが。

生物学科闘争の時に「教師のあり方、学生のあり方、大学そのもののあり方」等がいろいろと議論された。その頃の文書を今読み返してみると、まるで日本国憲法を読んでいる感がある。憲法なるものの精神が、まずその通り守られてきた事はないだろう。いや日本の憲法だけではない。アメリカの法律は人種差別を禁じているが、それは現在にいたるまで歴然と残っている。だからといって、それが必要でないという事ではない。憲法なるものはそうゆうものなのである。どこかの政党みたいに周りが変わったからすぐ変わる、という類のものではない。もしもあの当時の大学のあり方、教師と学生のあり方（相互批判）の精神を多くの教師が生かしていたならば、今の学校等をとりまく状況は異なったものになっていたと思う。

私の仕事場へ、自らの判断で高校をやめた人間、あるいは大学、大手企業をやめた若者が出入りしている。彼らは、何も理想を求めて、将来に夢を求めて、やめたわけではない。大きな葛藤の末の選択である。将来の経済的な事を考えて、彼らの親はみな反対をした。その気持ちは私にもわからないではない。おそらく本人達もそれはわかっていたと思う。それがわかっていても彼らに共通しているのは、自分に合っていない事（自分にひかれていたルールに乗って生きていく事）をやめなければ生きていけない、という決断だったと思う。周りから見ても、私の目からみても彼らはごくごく普通の若者である。不安定な収入の中でありながら、私よりもはるかに働きものである。自分の興味もしっかり持っている。私には彼らに、この先「どうしろ」という事も言えないし、また彼らがどう変わっていくのかもわからない。自分を受け入れない周囲に「いやだ」と言って出ていった彼らが、逆にふと、マトモな人間に思えてくるのである。

奥野会長が今の学生はイエスマン・イエスウーマンばかりが多くて困る、と言っていたが、それは大学（大学制度）がそんな人間を作りあげてきたのであって、大学の責任である。またそんな大学に満足している方達は、めでたく卒業、就職して、わき目もふらずに仕事して、立派（？）な人になったらいい。しかしおどす訳ではないが、どんな人間もみな、それなりに物事を考え、生きているのであり、それに人生には選というものもついて回るので、状況がいつ何時変わるかも知れない。ルールに載せられて走っている彼らが、ルールが突然なくなったら、果たしてそれに対応できるだろうか。

それにもう一つ、働きづくめでその内ヒマが出来たら興味でも捜して、老後はゆっくりしよう、という人が私の周りにも沢山いる。しかし興味というものは捜すものではない（仕事は捜すもの）。そう簡単にできるものではない。それはまともな生活をして十分な体力を維持しながら暮らしていくうちに、ゆっくりと出来てくるものであって、突然ヒマが出来てもすでに体力はなく、何もする事が見つからなくては、ボケる以外に道はない。私

などはこれまで、自分の興味の方に多くの時間と貴重なお金を投資してきたから、老後のヒマを心配することはなさそうだ（もっとも、今、現在が心配だけど）。

さて、そろそろ終りにしなければ、この悪字、悪文をワープロに打ち直している会長の苦悩に満ちた顔が浮かんできた。また結局最後に「お前は仕事もせず興味に生きてきた人間だ」という事をバラしてしまったが、私の人生において（善きにつけ悪しきにつけ）いろいろ影響をおよぼしてきた会長の、退官後の身のぶり方について心配していることも付け加えておこう。会長の頭の方はあまり心配していない。どうせ退官したのちでも、「生物学会パート2」、あるいは「統生物学会」等々、何かやるに違いない。《やらないよ》しかし、体の方は少々心配している。そこで、私の養魚場の迷宮会長に任命して、池のそうじ、魚の世話、犬（90キロの秋田犬）の散歩などの軽い仕事をやらせようかと、実は思っているのである。《いやだよ。身体は毎晩温泉へ行ってきたえるからいい=会長》

第3 編集局長

なんでまた、せつかくの休日だというのにこんな文を書いてんだろ。しかも、わざわざ原稿用紙まで買ってきて。本来の私なら会社で仕事のフリして書きちゃうんだけど。何故か今は新入社員なのだな、これが。卒業したのはずっと前なのに。なんでかな《注1》。

そーいや、学会誌はこれが最終号だそーで（原稿が集まりすぎてもう1号、なんてことはあるまい）《注2》、日本生物学会も解散とかするんですね、会長。しかるべき機関に（文部省？）解散届とか出して、もう2度とこんな事はしません、なんて誓約書を書かされて。まあ、中年暴走族（老年だな、今は）みたいなもんだな、もともと《注3》。

金沢から逃げ出すときに、「3局長」を返上しようとしたら、終身制だって言うし、まあ、荷物にもならないから、そのまんまだったけど、これを機にお役ご免ですかねー、私も。なーんも「お役」はやってないけど《注4》。それともやっぱり「学会が無くなっても、編集局はそのままや」とか言ってんですかねー、相変わらず。別にそのままでも困ることはないけど。

あ、そうだ。私も相変わらず極く私的な文しか書けないから、学会誌に何かを期待してる人は（いるかな？）この先は飛ばして次を読んだ方がいいと思うなー。親切で言ってんですよ、ホント。

学校を出るときにダメされて原稿を書いたけど、あれ1回なら若気のいたりで済んだのに、2度目となるとなー。魔がさしたとでも言いましょーか。ここで一句。

学会誌 書かないバカに 2度書くバカ（字あまり）《注5》

あー、全国の会員の皆さん、あなたの事ではないですよ、たぶん。だいたい、こーゆーものは1回書いて、あとで「いやー、あれは冗談、冗談」なーんて、力なく笑って、どこぞの中小企業の人事担当をダメしてもぐり込んで（醤油屋とは言ってないぞ）、スチャラカな（古い！）サラリーマンになって平和な日々を暮らすのが「道」というものなのになあ。それすら踏みはずしてしまうとはなあ……。

まあ今回は、会長は退官するっていうし（小人閑居して不善をなす、という言葉が浮かんだのは何故？）《注6》、3局員その1はハラが出てきたのにもかかわらず、めでたく結婚することになったし（もう君もこれまでだね、ふふっ）、3局員その2はガラにもなく働く公務員だし（いやー、とうちゃんは大変だねえ）、とか何とか、訳の判らん言い訳を言ってみても仕方あるまい《注7》。そーいや、むかし「こんな私に誰がした」みたいな事を言った学生がいたらしいけど。私もOさん（仮名）、Sさん（仮名）、Fさん（実名）《注8》たちのせいで道を踏みはずしてしまった、なーんて事は思っても言えせんね。怨、いやいや恩がありますから。（とは書いてみたものの思いつかないのは、何故？）《注9》

いやいや、なんかあるはずだぞ、えーと、Oさんにはコーヒー飲ませてもらったし（勝手に飲んだだけか）、Sさんには釣りにつれていってもらったし（釣れなかったけど）、Fさんにはメシを食わせてもらったし（説教も食らったけど）。学生の時の記憶がすべてこの辺に結びついているというのも、なんだかなー。もっとも、嫌な事はみーんな避けてたし。避けてるのに向こうから寄ってくるのもいたなー。ガニ股で「なにしてんだい？」なんて《注10》。「君は動1の学生じゃないんだから、この部屋から出て行け！」なんて腕を引っ張られたこともあったなー《注11》。そのおかげで動1だった3局員その1、その2が公然と居座れるようになったし。「君たち、ラッキーだったね」というのもあったぞ。俺たちは全然ラッキーじゃなかったぞ、あんたの不始末のかたづけをしたんだから《注12》。まあ、もうみんななくなっちゃったから、言ってもしよーがないけど。（亡くなった訳ではない、と思う。念のため）

と、ここまで書いたらすっかり飽きてしまった。いや、別に、原稿なんか書かなくても、と放っておいたらまた学会誌がきてしまった。電話セールスよりしつこいかもしれない。

それで、なるほど。要は、会長独裁がなくなるってことですな（編集後記しか読んでないもんで・・・）。原稿書く人とワープロ打つ人と印刷して発送する人がいなくなる、という訳でしょ。なーんだ、やっぱり困る事はないや。別に独裁下で“ひっそく”してたつもりはないし、自由の身だからってこれ以上はばたいたら、どこまで飛んでっちゃうか判らんし。だいいち、はばたいたって疲れるだけだ。墜落しちゃうかもしれないし、太った豚はいくらばたいても飛べないんだから、やっぱり、ポーってしてたりゴロゴロしてるのが一番《注13》。いやー、これからはこんなことも日本生物学会の活動と見なしていただけるなんて、ありがたいですねー。じゃ、とりあえず最初の活動として明日の仕事はサボることにします。（以下次号）

そうそう、会長室にあった『新さかな大図鑑』は、私があずかって保管してますから、御心配なく《注14》。

《注》

- 1 改めて考えることはあるまい。
- 2 それがあるんだな。お前さんが書いてきたから、ホッチキスで綴じる限界25枚つまり100ページを超えてしまった。『最終号（上）』『最終号（下）』の2本建てにしなくてはならない。最後の最後まで面倒な奴やな、ほんまに。
- 3 ほんとですよ。この間、白山1周300キロのツーリングに行ったのですが、会長、愛用のスーパーカブでヒラリヒラリ。われわれ追いつけませんでした。そのくせ、パトカーが出てきたらたちまち30キロに落とすんだから＝生態講座院生3人
- 4 最近の学会誌に時々登場してるやないか。出てこなくてもいいときに出てきて。《会長が勝手に出しているだけじゃないですか＝3局長》
- 5 バカとは何よ！ 私、創立以来の会員だけど、一度も書いてないのよ＝1女史。僕は1度しか書いてないからなあ＝S助教授。
- 6 閑居してなくても不善をなしている連中よりはましだと思うよ。「金沢大学50年史」などという官製の歴史本をつくるために、3年任期つきの助手を雇おうとしているのもいるからな。
- 7 当時落ちこぼれ3人組というのがいて、3年連続、3人揃って大学院に落とされた。そこで、D君を編集局長、F君（F女史ではない）とI君を編集局員にして、第3編集局をつくったのだが、混乱しただけだった。
- 8 なぜ私だけ「実名」なのよI＝F女史。
- 9 「恩」は思いつかなくても、「怨」のほうはたくさん思いつくだろう。
- 10 当時の動2講座O教授のこと。3局長の“恩師”。
- 11 当時の動1講座U教授のこと。3局員2人の“恩師”。
- 12 彼ら3人が夜遅く研究室に居残って、半仙半魚養魚場から依頼されたイワナの薫製作りにはげんでいたとき、植2講座で大量の水漏れが出ていたことを発見した。放っておくと下の3階に流れ落ち、化学教室の研究室が水浸しになる。（過去、けっこうそういうことが起こった）彼らはやむなく大奮闘してあふれた水を除去し、化学科に漏れるのを防いだ。翌朝やってきた植2講座のN教授が彼らに言った言葉がこれだった。
- 13 彼が学生の頃、東大の何とかいう学長が卒業式で、「太った豚になるよりは、やせたソクラテスになれ」と訓示した。そこで私は、食べることにしか「向上心」のない彼に説教したのだが、彼いわく、「僕はやせたソクラテスより太った豚のほうが好きです」
- 14 というわけで、荒賀先生、せっかく君からもらった愛蔵版の『新さかな大図鑑』は、彼の所へ行ってしまった。ご免ね。

【この原稿についていた手紙】

前略。先日はどーも。

皆様、相変わらずで、まあ、何と書いていいやら・

もう2度と書くまい、と心に決めていた訳ではないのですが、会長に「書け！」と命令されたので、衝動的にまた訳のわからん文章を書いてしまいました。わざわざ原稿用紙まで買いに行ってしまうところが、「私って、なんて素直な人だろー」と改めて感心してしまった次第です。

読み直すと、きつと嫌になってしまって、「あー、やめた」となるのはあまりにも明白なので、書き放しの一発勝負です。誤字脱字言語明瞭意味不明判読不能等々、あるはずですが、適当に推理を働かせて解釈してワープロ打ちして下さい。こうやってみると、字のきたなさだけは会長と勝負できるかもしれんなあ、と思います。S氏F氏I氏の皆様方、FさんKさん、それにAさん（＝編集局長補佐）にも、魚を釣りすぎて鳥のイサを減らさないよう、伝えてください。

みなさんによろしく。

草々 3局長

P S こんな立派なフートーはもったいないなー、なんで、こんなものがあるのかなー、と思ったら、以前、退職届を書いた時のものでした。
なんとも いやはや。

【S助教授と会長の会話】

S助教授：どーにも仕様のない奴やな、あいつは。

会 長：だいたい、「最終号」の下巻に、「以下次号」と書く奴やからなあ。富家さんも、「大学の風景（その1）」なんて書いてるし。

S助教授：「最終号」下の下、というのを出したらどうや。

会 長：下の下、か。下品きわまる文章を集めるか。

S助教授：それなら1号全部、第3編集局長に書かせればいいよ。

なんで生理の時は血がでてくるのか」「ホモにはこどもはできないのか」「なぜできないのか」「双子はうんとガンバッタからできたのか」という発生の本質に触れる(?)ような質問も出てくるし、「一回分の精液の中には何匹くらい精子がいるのか」「イヌやウマとヤツたらどんなこどもができるのか」「チンパンジーとならこどもはできるのか」「安全日は本当にヤツてもこどもができないのか」「この(教科書の)図のどこまで、チン〇がはいるのか」等々、彼らの質問には尽きるところがない。生き物が繁殖しようとする力強いエネルギーを目の当たりにする思いである。この集団だけを見ている限りでは日本の人口はまだどんどん増加しそうである。

しかたがないので、こちらとしてもせめて彼らの1・5倍くらいは教育的エネルギーを絞り出して、ひるむことなくがんばらないといけない。私の教育的エネルギーなんてFさんの1/50くらいのものであるから、あまり使うと無くなってしまいそうで困る。《誤解のないように言っておくと、F女史の1/50ということは、普通の人の少なくとも2、3倍はあるということである=会長》最初の1年間は本当に憂鬱だった。以前は女子高にいたため、見たこともないサル軍団にどう対処してよいかわからなかったのである。3年目の今年には自分でも結構余裕のある身のこなしではあるが、それでもパイタリティーと反射神経は必要だ。ぼーっとしているとすぐ「先生って、処女け？」なんて攻撃されてしまう。中年オヤジのセクハラ発言に限りなく近いこれらの言動をいなすキーワードは、意外にも「上品」と「下品」という言葉である。「そんな下品なことを言っちゃいかん」とか「授業中はもっと上品に」などというように使う。どんな子でもこの単語を使うと5秒くらいは首をすくめてしゅんとするから、なかなかの効き目である。「かあちゃんとそういう話すんのけ？」と逆に質問するのも効果的である。「うん、するよ」という子がいて妙に納得したこともある。こちらがムキになるのが一番いけない。相手はまだ中年オヤジではないので、違う反応が必要なようである。

さてそれから、寝てる奴を起こし、マンガとゲームを注意し、歩きまわる奴は座らせ、ノートと教科書を出させてから、科学的に重要な勘違いを取り上げ、クラス全員(?)に説明しながら授業を進めていくというのが、普通の授業のコースとなる。どんなにヒドイ質問でもできる限り科学的に生物学的に親切に答えるというのが一応私の方針ではある。しかし、「イヌとヤツても、ヒトとイヌとでは種として近縁ではないので、雑種はできない」と答えると、「じゃヤツてもいいんだね」(なんじゃそりゃ)と言う返事が返ってくるので、楽しいポルノの時間を理科の時間に変換させるのは非常に困難だということがよく理解できるのである。質問はこれだけではおさまらず、「今度のマラソン大会はどこを走るのか」とか「先生のクラスの女紹介してよ」とか「人間はいつからおとなになるの?」(よく考えるとスゴイ質問だが、すぐに彼は「毛が生えとおとななの?」と次の質問をしてきた)などとだんだん收拾がつかなくなってきて、しまいには本当に反射神経だけがたよりという感じになる。

とまあ、こんな感じで神経はかなり疲れるけれども、高校生という生き物との会話のやりとりは実に興味深い。子宮に着床したヒトの胞胚を示しながら、「みんなだって覚えていないかもしれないけど、昔は一度はこんなふうだったんだよ」と言うと、一瞬(だけ)はっとした表情になる。そしてどのクラスにも必ず「いや、オレは違うね」とジョークをとばす奴がいて、それがなんとも言えずかわいい。2秒くらいは私だって幸せになる権利があるというものだ。

日本生物学会消滅の日(序)

栗 岡 修 平

いよいよ独裁組織の解体する日が迫った。歴史上、独裁体制が崩壊する時には、戦争や革命といった大変動がつきものだが、わが日本生物学会の独裁制の崩壊は、そんな変動とは無縁に終わりそうである。

その昔、ロシアの赤軍兵士たちが冬宮になだれ込んだように、あるいは南ベトナム民族解放戦線のコマンド（その実体は北ベトナム軍兵士だったようだが）が解放戦線旗を翻して大統領府に突入したように、はたまたフィリピンの民衆がマラカニアン宮殿を取り囲んだように、独裁の終息を告げる劇的かつ象徴的な出来事が起こればおもしろいのだが、わが日本生物学会の終わりにはそんな劇的なことは期待出来そうにない。

しかし、それでも私は夢想する。20年にわたる会長独裁の軛（くびき）から解き放たれた全国の生物学会員が自由の雄叫び高く総決起することを。手に手に武器をふりかざし、という物騒なことは、学術団体でありインテリゲンチヤーやインチケゲンチヤーの集まりである日本生物学会には似つかわしくない。ただ、金を持っている者は金を、頭のいい者は頭を、スケベな者はエロ本をふりかざし、独裁の牙城＝日本生物学会の本部に押し寄せるということはあっていい。わずか数坪の本部の部屋に入り切れぬ程に押し寄せた数百の人々は口々に、独裁体制下で逼塞（ひっそく）を余儀なくされてきた日々への怨嗟の声と自由を獲得することへの喜びの声を挙げるだろう。鍛えに鍛えた独裁者の雄弁もその声の前にはかき消されてしまう。かくして独裁者は倒れ、ただちに臨時革命評議会が結成される。

やはり、独裁体制が倒れる時にはこの程度のドラマチックなことがあった方が面白いし、また後々の語りぐさにもなる。そう思って、面白がってこんなことを書き出したら、この先の話の展開はちょっとヤバイことになりそうである。

日本生物学会臨時革命評議会の議長にはF女史が選出されるだろう。というのも、独裁体制下の20年、沈黙を守りながら独裁に加担せず、同時に独裁会長やそのエピソードたちを震え上げさせていた存在はF女史をおいて他にない。権力の座を追われた独裁者が再び権力の獲得へ向かって動き出さない為には、かつての独裁者に恐怖を与えるだけの力が必要である。その力を有するのは、恐らくF女史をおいて他にないだろう。かくして、臨時革命評議会議長に就任したF女史は生物学会本部にある“一度座ったら二度と立ち上がれない椅子”の上に立ち、独裁の終焉と臨時革命評議会による権力奪取を高らかに宣言する。20年にわたる会長独裁体制の下で虐げられてきた日本生物学会員たちはその宣言を拍手と歓呼でもって迎えるだろう。

その時、私はどうしているか？ 変わり身の早さでもって独裁体制を罵り、臨時革命評議会に拍手を送って人々の中に紛れ込もうとする。だが、独裁体制の再生産に励んでいた過去が暴露され、人々の罵詈雑言にさらされてつまみ出される。

だが、臨時革命評議会の樹立を歓呼の声で迎えた日本生物学会員たちは、また新たな独裁権力が生まれたことをすぐに知ることになるだろう。そして、その臨時革命評議会の独裁体制は奥野会長の独裁体制よりも本格的なものであり、もっと恐ろしく苛烈なものであることを。

一時代を画した独裁体制が終焉する時には、多少は劇的な出来事があった方が面白い。しかし、劇的であればある程、おぞましい未来が想像される。そのおぞましさを避けるには、独裁体制といえども静かに幕を下ろした方がいいのかもしれない。

ということで、会長独裁の日本生物学会は平和裡にそして静かに消滅しそうである。めでたし、めでたし。

なお、本論は日本生物学会の消え去る日を予測した“序”に過ぎない。かつて椎名麟三

という作家は『永遠なる序章』という小説を書いた。かのマルクスも『ヘーゲル法哲学批判序説』なる本を書いた。世の中には“序章”や“序説”で終る本もある。だから私の文章も“序”で終るかもしれない。が、日本生物学会の劇的な解体とその後に起こるおぞましい出来事をこの眼で確かめ、『世界を揺るがした十日間』や『カタロニア賛歌』に劣るとも勝らぬリアルな“本論”を書きたいというヤマッ気も少しはある。

とにかく、長い間の独裁、ご苦労様でした。印刷する機会が減って、禁断症状が起きないことを願っています。

「日本生物学会」閉会のご挨拶

会長：奥野良之助

2代目会長の立候補者がついに現われず、ようやくわが「日本生物学会」も、その“栄光”の歴史を閉じることになった。やれやれ。

私がかかる「学会」を創立し、「学会誌」を発行しようと思いついたのは、ある院生との次のような会話が契機であった。彼は、修士卒業の年、就職できなくて1年居残るつもりだったのだが、不意に職にあたり、一夜で修士論文を書き上げて提出した。読んでみると、序論で終わっていて彼の研究のいちばんおもしろいところが書いてない。

「あのおもしろいところ、なんで書けへんのや」

「一晚では無理ですよ」

「まあ、修士論文に書かなくても、生態学会誌にでも投稿するんやな」

「でも、ぼく、生態学会に入ってません」

「じゃ、入れよ」

「いやです」

「なんでや？」

「あんな権威主義的な学会はきらいですから」

「そうか。それも一理ある。そうすると、君が投稿できるような学会をつくらなあかん」

こうして私は、「日本生物学会」の設立を決意した。ところが彼は、権威主義的な生態学会に入り、そのおもしろい研究を「日本生態学会誌」に投稿してしまったのである。この裏切りものめ！

きっかけはこの通りなのだが、もちろんその前にいろいろと伏線はあった。

そのころ、ちょっと必要があって、茶道のことを調べたことがある。茶道には、表千家とか裏千家とか武者小路千家とか、いろいろな流派があるが、それぞれ家元制度なるものを持っていて、弟子になると、小習いを皮切りに10段階にもおよぶ免状を取らなければならないことになっている。その都度がつぼりとお金を巻き上げるのだが、弟子が弟子を取って先生になるには、この免状のほかに講習と試験を受けて「地方教授」の看板をいただくかなければならない。茶道の先生になるには、年期と金が必要なのである。

考えてみれば、学会だって似たようなもので、まず学会に入り、毎年学会費を納め、他人よりたくさん論文を投稿し、ボス教授に取り入り、学会の役員などを忠実に務め、うまくいけば票を集めて会長になれる。やはり年期と金が必要である。

ところが、ある本に、「家元になるには、新しい流派をつくって宣言するだけでいい」と書いてあった。「表万家」の家元を自称すれば、いきなり茶道の大先生になれるのである。そうだとすれば、新しい学会をつくっていきなり会長を自称すればいいではないか。

かくして私は、「日本生物学会」を創立し、「設立趣意書」なるものを配った。もらった人の反応は三つに別れた。「学問の神聖さを冒瀆している」と烈火のごとく怒った人、「キャッキョ、おもしろい」と喜んですぐに入会した人、そして、いやそうな顔をしてゴミ箱に捨てた人である。

この設立趣意書には、当時の金沢大学理学部生物学科にいた人にしか分からない皮肉がちりばめられている。ちょっと解説しておこう。

「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが

「日本生物学会」閉会のご挨拶

会長：奥野良之助

2代目会長の立候補者がついに現われず、ようやくわが「日本生物学会」も、その“栄光”の歴史を閉じることになった。やれやれ。

私がかかる「学会」を創立し、「学会誌」を発行しようと思いついたのは、ある院生との次のような会話が契機であった。彼は、修士卒業の年、就職できなくて1年居残るつもりだったのだが、不意に職にあたり、一夜で修士論文を書き上げて提出した。読んでみると、序論で終わっていて彼の研究のいちばんおもしろいところが書いてない。

「あのおもしろいところ、なんで書けへんのや」

「一晚では無理ですよ」

「まあ、修士論文に書かなくても、生態学会誌にでも投稿するんやな」

「でも、ぼく、生態学会に入ってません」

「じゃ、入れよ」

「いやです」

「なんでや？」

「あんな権威主義的な学会はきらいですから」

「そうか。それも一理ある。そうすると、君が投稿できるような学会をつくらなあかん」

こうして私は、「日本生物学会」の設立を決意した。ところが彼は、権威主義的な生態学会に入り、そのおもしろい研究を「日本生態学会誌」に投稿してしまったのである。この裏切りものめ！

きっかけはこの通りなのだが、もちろんその前にいろいろと伏線はあった。

そのころ、ちょっと必要があつて、茶道のことを調べたことがある。茶道には、表千家とか裏千家とか武者小路千家とか、いろいろな流派があるが、それぞれ家元制度なるものを持っていて、弟子になると、小習いを皮切りに10段階にもおよぶ免状を取らなければならないことになっている。その都度がつぼりとお金を巻き上げるのだが、弟子が弟子を取って先生になるには、この免状のほかに講習と試験を受けて「地方教授」の看板をいただくかなければならない。茶道の先生になるには、年期と金が必要なのである。

考えてみれば、学会だって似たようなもので、まず学会に入り、毎年学会費を納め、他人よりたくさん論文を投稿し、ポス教授に取り入り、学会の役員などを忠実に務め、うまくいけば票を集めて会長になれる。やはり年期と金が必要である。

ところが、ある本に、「家元になるには、新しい流派をつくって宣言するだけでいい」と書いてあった。「表万家」の家元を自称すれば、いきなり茶道の大先生になれるのである。そうだとすれば、新しい学会をつくっていきなり会長を自称すればいいではないか。

かくして私は、「日本生物学会」を創立し、「設立趣意書」なるものを配った。もらった人の反応は三つに別れた。「学問の神聖さを冒瀆している」と烈火のごとく怒った人、「キャッキャッ、おもしろい」と喜んですぐに入会した人、そして、いやそうな顔をしてゴミ箱に捨てた人である。

この設立趣意書には、当時の金沢大学理学部生物学科にいた人にしか分からない皮肉がちりばめられている。ちょっと解説しておこう。

「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが

設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、“生物”には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、“日本”生物学会であるので、日本語以外は受つけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である）二次会はさまざまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこぼさない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会長 奥野良之助

私が金沢へきたのが1972年、そしてそのころ、生物学科の院生と学生は、テーマの自由を要求して果敢に闘争をしていた。と言っても、角材を持って現われるわけではない。質問状を持って現われ、こともあろうに大学教授に向かって理論闘争をいどむのである。そして勝つのがたいして学生であるところがおもしろかった。理論闘争に負けた教授は、ついに教室会議を解散し教授独裁を宣言した。教室会議の一員として管理者側に属していた助教授・講師・助手・教務助手・非常勤教務助手は一瞬にして被管理者に転落し、教授追及のためにグループを結成した。そこまではよかったが、その名前でもめた。職種が五つもあるから、うまい名前がない。

「どうや。教授以外の教官という意味で、“非教授会”というのは」

断っておくが、この提案をしたのは私ではない。もっとまじめな先生が提案した。そうとう経ってから、さらにまじめなある先生が言った。

「非教授会って、考えてみたら変な名前だね。教授でないというだけだから、大工さんでも学生でも、みんな入れるね」

「会員の資格は非教授とする。要するに教授以外であればだれでもよい」というのは、この経過を踏まえたものである。独裁教授は入れてやらないという宣言だった。ところが生物学科に一人変な教授がいて、どうしても入りたいという。変な教授は数学科にも一人

いた。二人とも私と仲よしだったから、困ってしまって、会則に追記をした。

会則追記

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、何としてでも入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

ちなみに、「徴収」の徴はワープロミスではない。

不名誉会員は、初めはこの二人だけだったのだが、次第に増えてきて、最盛期には十数人に達していた。その多くは、助手・助教授で会員になったのにいつのまにか教授に昇格した人である。日本生物学会の会員でありながら教授に昇格するなどまことに怪しからん話なのだが、まあやむを得ない。学会財政が大いに助かったこともあるしね。

創立会員以外の新入会員は、おおむね口コミでこの学会を知った人である。もっとも、会員が勝手にマスコミを使って宣伝したケースが2回あった。

一つは、私の須磨水族館時代の友人である神戸新聞社の記者が、断わりもなく新聞に記事を出した。けっこう大きな記事で、私のことをおもしろおかしく書いていた。私は彼を叱りつけた。

「おい。勝手なことしたら困るやないか」

「だって、宣伝になるでしょう。会員が増えていいじゃないですか」

「それが困るんや。会員があんまり増えたら、学会が潰れてしまうやないか」

「えっ!? どうしてですか」

「会員が1万人にもなってみろ。1万部刷って製本して発送するなど、とても一人じゃできんからな」

幸い、神戸市にはおっちょこちょいな人は少なかったと見えて、ほんの数人入っただけだった。この記事を見て、教育のために息子を連れて入会申し込みをした真面目なお父さんがいて弱ったが、数回学会誌を送ったら離れていってくれた。教育にはならないと思われたのだろう。

もう一つは、これは大学の先生だが、受験雑誌にお勧め学会として書いてくれた人がいる。このときは何人も高校生から入会申し込みが相次いで、あわててしまった。高校時代にこんなもの読んでいたら、大学に落ちること間違いなしだものね。もっとも、このとき入会し、いまでも会員でがんばっている元高校生も数人いる。

日本で出されるすべての印刷・発行物は、たとえこんな雑誌でも、国立国会図書館に一部寄贈することが義務づけられているそうである。でも、贈ってやらなかった。自民党の支配する国会には、恨みこそあれ義務は感じない。ところが、第1号を発行して間もなく、京都府立総合資料館というれっきとした公立の施設から、「一部寄贈してほしい」という依頼が舞い込んだ。誰に聞いたのか知らないが、当然誤解していると思って、まあ第1号を見たらわかるだろうと、とりあえず送っておいた。すると、「『日本生物学会誌』第1号、受領いたしました」という正式の受領書がきた。第2号は送らずにいと、「送っていただきたい」という葉書が来る。どうやら総合資料館には「変な人」がいるらしいと気がついて、それからは毎号送っている。必ず受領書が来るから、粗略に扱われているわけではなさそうである。いったいどんな人だろう、と思いつつ、そのままにしていたら、ある時我が大学以来の恩師に会って疑問は氷解した。なんと、生物学会の会員であるその恩師の娘さんが、資料館に勤めていたのである。だから、国会図書館にはないが、京都府立総合資料館で永久に保管されることになった。

やってみて、いちばん当てがはずれたことは、会員がほとんど原稿を書かないというこ

とである。創立以来の会員で、しかも毎年欠かさず会費を納めている人が結構いるが、その大半は一回も投稿していない。普通会员でも20年で2万円、不名誉会員なら4万円も会費を払っているのにね。「大学における科学研究費の問題」という大作を連載すると、創立当初から宣言していたF女史は、最後の最後にいたってついに投稿した。本号に載っている。しかも(1)とナンバーを打って、「これからも、2、3、4と書いていくのよ」とのたわまっている。書くのは勝手だが、載せようにも載せる雑誌がなくなっているのにね。何しろこれが「最終号の下」なのだから。

編集局長について一言しておこう。疑い深い会員は、編集局長など実在せず、すべて会長の創作だと思っている。現に、私の『ヒキガエル』の本の出版記念会があったとき、第7編集局長が名乗りを上げると、満場どよめいた。「ほんとにいたのやなあ」。第7に限らず、1局長から7局長まで、全員実在しているのである。3局長は局員2人持っていたし、5局長にいたっては5、6人もいた。まあ、先に本誌に登場して、その後で実在するようになった編集局長もいないではないが。歴代局長の性格はさまざまだが、共通しているのは何もしないことと、いつもコーヒーを飲みに来ていたことである。

もう一人、編集局長補佐というのがいる。彼は第1局長よりも古くからいる。編集局長がいなくても編集局長補佐がいるというのは妙だが、長と名のつく役職はきらいだと言い張って、編集局長なしの編集局長補佐になってしまったのである。なんでも、職場では徹底的にホサれているのだそうで、金沢大学、いや全国の大学の教員中、もっとも暇な教員だと、自他ともに認めている。時々投稿しているが、いつも違ったペンネームを使っているので、どの論文が彼の書いたものかは、当人と私しか知らないことになっている。

ペンネームと言えば、こんなことがあった。「投稿規定」を決めたとき、その1項に、「匿名、変名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい」とあるのをみたある学生が、「じゃ、僕が会長の名前で無茶苦茶書いてもいいのですか」と言ったのである。そのくらいで閉口しては独裁会長は勤まらない。「いいよ。何でも書け。その代わり、おれが君の名前で書くけど、いいな」。彼は書くのをあきらめた。とても太刀打ちできないと思ったのだろう。

民主主義社会では、弁論と文章が勝負である。特に、権力の座についていないものは、それしか武器はない。反権力で闘うつもりがあるのなら、舌と指——今はワープロ時代だものね——は鍛えておく必要がある。文章というものは表現「技術」なのだから、練習する以外に鍛える方法はない。その訓練の場としてこの「日本生物学会誌」を提供したつもりなのだが、どうやら目論見はずれたようである。最後にきつく叱りおく。

とは言え、この20年は楽しかった。途中でちょっといやになった時期もあったが——丸1年、学会誌を出さなかった年もある。その年は徳政令を発して全員会費免除にしたが一みんなから会費を巻き上げて好き放題勝手なことを書いてきたのだから、そうとう満足している。特に最後の1年は、我ながら無茶だったと思う。

とにもかくにも、この勝手気ままなじいさんに、辛抱強く付き合っていたいただいた会員諸氏に深くお礼申し上げて、「日本生物学会」閉会のご挨拶にしよう。もっとも、また思いがけないところに現われて、みなさんを悩ませるかも知れないが。

1997年1月1日

● 会員のカードを整理していたら、こんな結果にがでてきました。

延会員数 449名

現会員数 185名

途中退会数 264名(内、死亡5名、正式退会2名、残りは行方不明)

創立以来閉会まで会員であり続けた奇特な方は32名です。

【第7編集局長】

【 会 計 報 告 】
1996年4月～1997年3月

取	入		
	100円会員	8人	800円
	1000円会員	150人	150000円
	2000円会員	9人	18000円
	寄 付	4件	115920円
	前年度繰り越し		54740円
	計		339460円
支	出		
	再生紙	30000×1.6円	48000円
	封 筒	1700×3.8円	6460円
	送 料	42-50号	205000円
		おまけ・最終号	80000円
	計		339460円
差し引き取支			0円

【監査報告】

監査：それにしても、うまいこと帳尻、合わせはりましたな。どかんと寄付が来たりして。

会長：会員に近々、大金を手にする人がいましてなあ。寄付してくれましたのや。

監査：誰や知りまへんけど、こんな「学会」に寄付するなんて、奇抜な人ですな。

会長：こんな「学会」やから寄付しはったんでっしゃろ。世の中、物好きな人がいますさかいな。

監査：まあ、何とかすんで、やれやれですわ。ずっと、公文書偽造・監査不十分で捕まれへんかと、ピクピクしてましたのやで。

会長：まあ、長いことご苦労さんでした。忍太郎さんにもよろしくな。

日本生物学会 会計監査 夢籍 忍次郎 印

《ついでに、学会創立以来の総会計を出してみました。ご参考までに》

総会計（1977～1997）

取 入 の 部		支 出 の 部	
100円会員	48400円	紙代	430180円
1000円会員	1460000円	ファクス原紙	86440円
2000円会員	350000円	封筒その他	51750円
寄 付	129100円	送料	1419130円
計	1987500円	計	1987500円

会員から200万円ほどまきあげて、325850枚の紙を使い、20年間遊ばせてもらったというわけです。ほんとにみなさん、ご苦労様《会長》

『日本生物学会誌』総目次

第1号(1977年7月)	
倉淵真悟：ナミウズムシ <i>Dugesia japonica</i> の地理的隔離による変異	1
宮前俊一：認識が構成されるとき現われる先験的直感の起原について	11
腹立益数：無題	30
野良：哲学雑話—毛沢東 その1	32
『日本生物学会』設立趣意書・投稿規定	34
学会および非学会記事	36
第2号(1978年4月1日)	
半仙半魚：偏見と独断(1)	37
半仙半魚：偏見と独断(2)	39
さいとうしげる：データ偽造事件	41
野良：哲学雑話—毛沢東 その2	43
野良：大学学(その1) 大学とはなんぞや、を問う学問	46
自然原人：「非自然保護論」を切る	54
奥野良之助：魚 陸に 上る(1) 魚から人間までの歴史	60
チビ：書評 ノーマン・マクベス著長野・中村訳『ターウィン再考』	68
学会および非学会記事	71
会計報告	72
第3号(1978年6月10日)	
半仙半魚：偏見と独断(3)	73
野良：金沢大学だより—4年生の1年	78
横町の隠居：古い博物屋のボヤキ	79
足立興一：生物の歴史性が忘れられたとき—綿ふき病の示すもの	81
奥野良之助：魚 陸に 上る(2)	86
蛸遊雲：“手記” ある生態学徒の墮落(1)	99
奥野良之助：書評 マフモード・マンガニ著自主講座人口論グループ訳 『反「人口抑制の論理」』	104
編集者への手紙	107
学会および非学会記事	108
第4号(1978年8月25日)	
半仙半魚：偏見と独断(4)	109
ヨミビトシラス：雨ニモマケズ	111
奥野良之助：魚 陸に 上る(3)	112
野良：大学学(2)	121
蛸遊雲：“手記” ある生態学徒の墮落(2)	134
編集者への手紙	140
学会および非学会記事	140
第5号(1979年5月10日)	
半仙半魚：偏見と独断(5)	141
S・S：恐るべき人間集団の魔性(1)	144
S・S：恐るべき人間集団の魔性(2)	147
鯨太郎：大学とのかかわり	151
野良：哲学雑話(3) 毛沢東(その3)	153
蛸遊雲：“手記” ある生態学徒の墮落(3)	157
チビ：書評 なだいなだ著「わが輩は犬のごときものである」	169
ザンクトT. U.：書評 奥野良之助著『生態学入門』	171

編集局だより	174
編集者への手紙	174
会計報告(1978)	176
第6号(1979年7月10日)	
黄泉の国の土民:ケチをつける	177
野良:哲学雑話(4)毛沢東(その4)	181
奥野良之助:ホンソメワケベラのミミクリーニセクロスジギンボの行動	186
奥野良之助:魚 陸に 上る(4)	200
編集局だより	212
第7号(1979年12月20日)	
レオパルト・2:人間の魔性(1)	213
亜無比有馬:カエルのぼやき	216
足立興一:総会、そのほか	219
奥野良之助:書評・西沢紀生編著『われら生涯ヒラ教員』	238
奥野良之助:書評・松本直治著『原発死』	239
第8号(1980年12月20日)	
奥野良之助:日本生態学会シンポジウム	
「自然と人類文明の共存は可能か」傍聴記	249
ミス・コメット:居候ネコの話《ネコとして自覚し自信を持っている一代目と、人間もネコだとおもっているのかネコの自覚に欠ける二代目ネコの比較》	254
チーフテンMK1:人間の魔性(2)	258
奥野良之助:環境庁・公害研究所 見学記	262
奥野良之助:魚 陸に 上る(5)	267
編集局だより	284
第9号(1980年7月26日)	
フェリス・エレガンス:東京で	285
大口教授:アルコール自動車について	296
奥野良之助:魚 陸に 上る(6)	297
編集局だより	318
会計報告(1979)	320
第10号(1981年5月15日)	
半仙半魚:偏見と独断(6)	321
沢田精一:SP盤を聞いて現在のステレオについて思うこと	323
奥野良之助:魚 陸に 上る(7)	327
加藤喜代志:日常生活と政治—政治へのかかわり	341
小口助教授:雪の所有権	354
編集局だより	356
会計報告(1980)	358
第11号(1981年12月31日)	
安仁屋良一:「マニアック記」	361
加藤初江:今、教科書問題を考える	366
奥野良之助:魚 陸に 上る(8)	380
編集局だより	396
第12号(1982年3月31日)	
加藤喜代志:社会科学の方法—アダム・スミス『天文学史』をめぐって	397
奥野良之助:人体における胃の役割に関する実験的研究	
—その起原についての考察	406
半仙半魚:偏見と独断(7)	414

Y・K：書評 鈴木真一著『大学の秘密』	416
佐道昭：江戸時代の飢饉	417
奥野良之助：魚 陸に 上る(9)	427
編集者への手紙	432
編集局だより	432
第13号(1982年10月1日)	
澄田宏：アナクシマンドロスの生命発生説に関する若干の考察(1)	433
高隆三：残さるべき一つの記録(1)	442
奥野良之助：魚 陸に 上る(10)	445
松本郁夫：生態学者の精神分析	454
小知間間：黄色い糸	458
チビ：書評 近ごろ読んだ本	463
会計報告(1981)	466
会長への手紙	467
編集局だより	468
第14号(1982年10月25日)	
高隆三：ある夏のできごと	469
細見彬文：インド・コーチン大学訪問記	470
奥野良之助：大学教授のモラル	482
奥野良之助：書評 伊沢紘正著『ニホンザルの生態』	496
生物学誇大辞典：こんちゅう	501
日本生物学会設立趣意書	502
日本生物学会投稿規定(改正)	503
編集局だより	504
第15号(1983年4月25日)	
松本郁夫：生態学者の実存分析	505
細見彬文：西アフリカ、ダカール大学訪問記	516
半仙半魚：偏見と独断(8)	525
栗間修平：『地震・憲兵・火事・巡査』(書評とおぼしきもの)	530
田中敏之：課題研究発表会の事後報告として	536
生物学誇大辞典：とり	537
会計報告(1982)	538
編集局だより	539
第16号(1983年12月24日)	
細見彬文：北アイルランド、クイーンズ大学訪問記	541
奥野良之助：魚 陸に 上る(11)	550
生物学誇大辞典：帰化	559
流石三十美：教員採用試験考	560
奥野良之助：“1000メートル以下クラブ”始末記	565
下菊マダム：書評 『車を捨てた人たち』	569
丹後支部長：丹後だより(1)	571
編集局だより	573
第17号(1984年3月30日)	
澄田宏：アナクシマンドロスの生物発生説に関する若干の考察(2)	577
阿波六吉：京都薄情——日本動物行動学会第二回大会異聞	589
不名誉教授：例外人生(1)	594
奥野良之助：生物地理談話会始末記	602
編集者への手紙	607

編集局だより	609
第18号(1984年5月15日)	
澄田宏: アナクシマンドロスの生物発生説に関する若干の考察(3)	613
奥野良之助: 魚 陸に 上る(12)	631
新聞記事から: “割りばし”をめぐり農林官僚と製造業者の論争	640
奥野良之助: 「京大生態学講座在郷軍人会」始末記	643
編集者への手紙	646
編集局だより	646
会計報告(1983)	646
第19号(1984年12月15日)	
奥野良之助: 車文明批判	649
加藤喜代志: 映画「水俣病—その20年」の感想文を読む —センチメンタリズムからヒューマニズムへ	654
子ビ: 書評 メイ・レティス『睡眠革命—われわれは眠りすぎていないか』	671
新聞記事から: “割りばし論争”そのあと	673
編集者への手紙	677
編集局だより	680
第20号(1985年6月14日)	
ナマケモノ: カッコウとヨシキリ	685
にぎりめ小僧: 閑人だより(1)	692
小林美香: 連想ゲーム—教育編	700
丹後支部長: 丹後だより(2)	704
奥野良之助: 魚 陸に 上る(13)	706
編集局だより	715
会計報告(1984)	726
第21号(1985年12月20日)	
海老人空耳: クラグはPULANKTONであるか	729
不名誉教授: 例外人生(2)	747
カラボネヤミ: 書評 『津軽共和国憲法』	764
生物学誇大辞典: しっぽ めいよきょうじゅ・ふめいよきょうじゅ	746 765
編集者への手紙	766
編集局への手紙	768
編集局だより	769
第22号(1986年6月30日)	
奥野良之助: 阪上教授への手紙—チエルノファイリ原発事故に関連して	773
本郷支部長: 人間生態学への招待(1)	779
藤田茂: 体験的“周期的四肢マヒ”の研究	791
栗間修平: ある独裁の記録	793
本郷支部長: かくれキリシタンの話	800
奥野良之助: 魚 陸に 上る(14)	805
生物学誇大辞典: ちょうちんあんこう	804
編集者への手紙	813
編集後記	814
会計報告(1985)	815
第23号(1986年12月8日)	
戸田盛康: 環境論論争における「主体」の行方—生態学と環境概念	817
奥野良之助: 魚 陸に 上る(15)	841

海を渡った浜名湖ウナギ：アメリカの人間達	847
半仙半魚：偏見と独断（9）	850
奥野良之助：金沢城明け渡し異聞——金沢大学総合移転始末記	853
生物学誇大辞典：かも	840
編集局だより	857
第24号（1987年8月31日）	
マジメの中の軟体動物：高校生からの報告（1）	861
マジメの中の軟体動物：高校生からの報告（2）	863
水原洋城：猿学万歳（1）	871
上市米：斟酌歌心正体学	882
奥野良之助：金沢城明け渡し異聞（2）	888
生物学誇大辞典：後天性教授願望症候群	896
編集者への手紙	898
編集局だより	899
会計報告（1986）	903
第25号（1988年1月15日）	
水原洋城：猿学万歳（2）	905
栗間修平：しいの実拾いの記	920
上市米：統・斟酌的歌心正体学	929
生物学誇大辞典：うそ	919
精神免疫	928
編集者への手紙	937
編集局だより	938
第26号（1988年3月31日）	
奥野良之助：魚 陸に 上る（16）	949
水原洋城：猿学万歳（3）	957
本郷支部長：人間生態学への招待（2）	967
生物学誇大辞典：Homo sapiens var. todaisotsu	955
3局長：書評 シンプソン著奥野良之助訳『ダーウィン入門』	975
編集者への手紙	982
編集局だより	987
編集、してないけど、後記	990
第27号（1989年10月10日）	
奥野良之助：魚 陸に 上る（17）	993
松永明美：反原弊——汚染食品を食べてガンになりたくない	1009
栗間修平：ねずみとり戦記	1011
青丹齋：K氏のケチについて	1020
春咲小紅他：リレー落語	1022
青丹齋：マラリア異聞	1026
万年学生：大学生活18ヶ条	1027
4局長：日本生物学会会長室のご案内	1032
編集後記	1037
真正編集後記	1039
会計報告（1987+88）	1040
第28号（1991年7月31日）	
半仙半魚：偏見と独断（10）	1041
栗間修平：わが「薬病」記	1043
筆無精：ワープロ礼賛	1061

公家：仏陀生物学（１）	1064
公家：仏陀生物学（２）	1067
？：時事放談	1070
生物学誇大辞典：じえいたい	1076
編集者への手紙	1077
編集局だより	1082
編集後記	1083
会計報告（１９９０）	1084
第２９号（１９９１年８月１日）	
奥野良之助：現実主義者のある日の幻想	1085
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ	1104
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ	1108
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ	1110
奥野良之助：ヒキガエルの自然誌（１）	1113
新聞記事から：ふたたび割りばし論争	1134
編集局だより	1136
第３０号（１９９１年１２月３１日）	
半仙半魚：偏見と独断（１）	1137
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ（４）	1140
奥野良之助：ヒキガエルの自然誌（２）	1143
奥野良之助：自衛隊を海外に派遣するな——わが「金沢大学平和問題 ネットワーク」の果敢なる？闘争	1168
日本生物学会 会長公募	1173
第３１号（１９９２年１０月１５日）	
加藤喜代志：移転とストの大英図書館	1177
椿二十郎：ウクレレ漫談	1185
奥野良之助：金沢大学平和問題ネットワークの果敢なる戦い（その２）	1187
金沢大学平和問題ネットワーク：『ネットワーク・ニュース』１～１５号	1188
会計報告（１９８９・９０・９１）	1224
第３２号（１９９３年６月１０日）	
奥野良之助：現実主義者のある日の幻想（２）	1225
奥野良之助：『犬死に』考	1246
金沢大学平和問題ネットワークの果敢なる戦い（その３）	1252
編集局だより	1262
会計報告（１９９２）	1268
第３３号（１９９３年７月３１日）	
奥野良之助：『自由の森学園』見学記	1269
盛口満：飯能博物誌モドキ	1279
栗岡修平：小人閑居して	1283
奥野良之助：大学における学生の地位 ——新進気鋭の学教官は、今、何を考えているか	1298
のら：いっせい草抜きボランティア——理学部の人は勤労奉仕がお好き	1310
編集局だより	1313
第３４号（１９９３年１０月３１日）	
半仙半魚：私のきらいなもの（人）その１	1317
奥野良之助：『助教教授』考——筋違いの恩師・故徳田御穂助教授のこと	1320
椿二十郎：ばーかもん	1340
関西支部結成のお知らせ	1343

通告書	1344
日本生物学会関西支部 旗揚げ!!!	1345
編集局だより	1354
第35号(1994年11月20日)	
小野喜三郎: 夢のような話—是非21世紀に実現を	1362
〇〇〇郎: ある大学院生のひとりごと	1363
渡辺 稔: 村の風景	1367
奥野良之助: 北朝鮮とアメリカと、どちらが怖い?	1372
奥野良之助: 「銃は禁止されてもナイフがあるよ」	1378
編集局だより	1390
会計報告(1993)	1403
第36号(1995年6月1日)	
畑 安次: 戦後50年と天皇・「靖国」・自衛隊	1404
栗岡修平: 病棟閉鎖始末記	1417
奥野良之助: 身体の中の歴史—比較形態学入門(1)	1428
編集局だより	1446
会計報告(1994)	1447
第37号(1995年7月1日)	
半仙半魚: 私のきらいなもの「大学入試」	1448
奥野良之助: 身体の中の歴史(2)	1451
奥野良之助: 2年間にわたる『最終講義』(1)	1479
生物学誇大辞典: こうざちよう	1450
編集局だより	1493
第38号(1995年11月20日)	
奥野良之助: 身体の中の歴史(3)	1499
奥野良之助: 国を守るということ	1520
編集局だより	1528
第39号(1996年2月1日)	
奥野良之助: 身体の中の歴史(4)	1541
奥野良之助: 2年間にわたる最終講義(2)	1573
編集局だより	1578
第40号(1996年2月29日)	
奥野良之助: 一少年の戦争体験と戦後日本の歩み(1)	
—金沢大学総合科目『戦争と平和』における講義—	1585
奥野良之助: 身体の中の歴史(5)	1602
栗岡修平: 土地が欲しいのは誰か?	1620
編集局だより	1628
第41号(1996年3月1日)	
奥野良之助: 身体の中の歴史(6)	1629
奥野良之助: 一少年の戦争体験と戦後日本の歩み(2)	
—金沢大学総合科目『戦争と平和』における講義—	1643
編集局だより	1665
第42号(1996年4月15日)	
奥野良之助: 身体の中の歴史(7)	1673
栗岡修平: “中海”から見えるもの	1689
奥野良之助: 2年間にわたる最終講義(3)	1696
編集局だより	1709
会計報告(1995)	1714

第43号 (1996年6月1日)	
奥野良之助：身体の中の歴史(8)	1717
しょうじれいこ：女性の経済的自立こそ	1732
半仙半魚：続「私のきらいなもの」	1736
奥野良之助：2年間にわたる最終講義(4)	1739
生物学語大辞典：アミツズ=後天性免疫不全症候群	1738
編集局だより	1755
第44号 (1996年7月1日)	
奥野良之助：身体の中の歴史(9)	1761
編集局だより	1790
日本生物学会誌最終号 原稿大募集	1804
第45号 (1996年8月1日)	
盛口 満：毛虫は毛虫	1804
栗岡修平：日本生物学会私史	1807
奥野良之助：ダーウィン『種の起原を読む』(1)	1817
奥野良之助：沖縄は日本の「植民地」だった	1837
編集局だより	1846
第46号 (1996年8月15日)	
奥野良之助：毛沢東『実践論・矛盾論』を読む(1)	1847
奥野良之助：ダーウィン『種の起原』を読む(2)	1862
編集者への手紙	1886
編集局だより	1888
第47号 (1996年9月1日)	
奥野良之助：2年間にわたる最終講義(6)	1891
奥野良之助：ダーウィン『種の起原』を読む(3)	1902
奥野良之助：毛沢東『実践論・矛盾論』を読む(2)	1922
編集者への手紙	1931
第48号 (1996年9月15日)	
浅野純一：なぜか帰国報告	1935
奥野良之助：ダーウィン『種の起原』を読む(4)	1942
奥野良之助：毛沢東『実践論・矛盾論』を読む(3)	1955
奥野良之助：裁判官の文章と論理と倫理	1966
第49号 (1996年10月1日)	
奥野良之助：毛沢東『実践論・矛盾論』を読む(4)	1979
奥野良之助：ダーウィン『種の起原』を読む(5)	2010
編集者への手紙	2023
第50号 (1996年11月15日)	
青丹斎：ホタルの幼虫はなぜ光る	2024
奥野良之助：『種の起原』を読む(7)	2027
奥野良之助：二年間にわたる「最終講義」(7)	2052
編集者への手紙	2060
編集局だより	2064
これが最後の「編集後記」	2067
おまけ号 (1996年12月1日)	
奥野良之助：生態学の素描	1~59
最終号【上】 (1997年1月1日)	
小野喜三郎：よい本ちよつとつまみぐい	2068
第1編集局長：一研の思い出	2072

加藤喜代志：奥野良之助氏の人と仕事	2074
なまけもの：木と本	2081
佐藤卓也：さかな魚サカナ	2082
岡田侑子：はじめておわりのご挨拶	2100
長井幸雄：自然環境保全という名の自然破壊	2101
中山美香子：残念!! 「日本生物学会誌」	2102
平田幸雄：進化のゆくえ	2103
相生啓子：世紀末への鎮魂歌	2104
関西支部事務局長：総括	2112
関西支部：臨時総会報告	2113
田亀源五郎：雑木林が残されるために必要なもの	2114
ニセコロジスト：「何冊かの本」――思いつくことあれこれ	2115
農林水産部長：里山考（1）――農業問題	2119
農林水産部長：里山考（2）――里山を守ろうということ	2120
最終号【下】（1997年1月1日）	
石黒隆文：埼玉県における「君が代」のとりあつかいについて	2122
金井塚努：「日本生物学会」中国支部から	2114
富家雅子：大学の風景（その1）	2126
沢田さつき：生物学会誌の思い出	2129
山田和彦：しめっぽいあのころの私から感謝の気持ちをこめて	2130
遊興人：何を求めるか?	2132
半仙半魚：アミズ（AMIDS）	2135
石川順子：高校というところ～進学校でない場合～	2146
栗間修平：日本生物学会消滅の日（序）	2148
奥野良之助：「日本生物学会」閉会のご挨拶	2150
会計報告（1996年度）付：総会計	2154
総目次（1～50号・おまけ号・最終号上下）	2155
総索引（同上）	2164

『日本生物学会誌』 総索引 (著者名)

相生啓子：世紀末への鎮魂歌	【最終上】	2104
青丹齋：K氏のクチについて	【27】	1020
青丹齋：マラリア異聞	【27】	1026
青丹齋：ホタルの幼虫はなぜ光る	【50】	2024
浅野純一：なぜか帰国報告	【48】	1935
足立興一：生物の歴史性が忘れられたとき——綿ふき病の示すもの	【3】	81
足立興一：總會、そのほか	【7】	219
安仁屋良一：「マニアック記」	【11】	361
阿波六古：京都薄情——日本動物行動学会第二回大会異聞	【17】	589
亜無比有馬：カエルのぼやき	【7】	216
石川順子：高校というところ～進学校でない場合～	【最終下】	2146
石黒隆文：埼玉県における「君が代」のとりあつかいについて	【最終下】	2122
海を渡った浜名湖ウナギ：アメリカ的人間達	【23】	847
S・S：恐るべき人間集団の魔性(1)	【5】	144
S・S：恐るべき人間集団の魔性(2)	【5】	147
大口教授：アルコール自動車について	【9】	296
岡田侑子：はじめでおわりのご挨拶	【最終上】	2100
奥野良之助：魚 陸に 上る(1) 魚から人間までの歴史	【2】	60
奥野良之助：魚 陸に 上る(2)	【3】	86
奥野良之助：魚 陸に 上る(3)	【4】	112
奥野良之助：魚 陸に 上る(4)	【6】	200
奥野良之助：魚 陸に 上る(5)	【8】	267
奥野良之助：魚 陸に 上る(6)	【9】	297
奥野良之助：魚 陸に 上る(7)	【10】	327
奥野良之助：魚 陸に 上る(8)	【11】	380
奥野良之助：魚 陸に 上る(9)	【12】	427
奥野良之助：魚 陸に 上る(10)	【13】	445
奥野良之助：魚 陸に 上る(11)	【16】	550
奥野良之助：魚 陸に 上る(12)	【18】	631
奥野良之助：魚 陸に 上る(13)	【20】	706
奥野良之助：魚 陸に 上る(14)	【22】	805
奥野良之助：魚 陸に 上る(15)	【23】	841
奥野良之助：魚 陸に 上る(16)	【26】	949
奥野良之助：魚 陸に 上る(17)	【27】	993
奥野良之助：書評 マンタニ著『反「人口抑制の論理」』	【3】	104
奥野良之助：書評 伊沢敏正著『ニホンザルの生態』	【14】	496
奥野良之助：書評 西沢紀生編著『われら生涯ヒラ教員』	【7】	238
奥野良之助：書評 松本直治著『原発死』	【7】	239
奥野良之助：ホンソメワケベラのミミクリーニセクロスジギンボの行動	【6】	186
奥野良之助：日本生態学会シンポジウム 「自然と人類文明の共存は可能か」傍聴記	【8】	249
奥野良之助：環境庁・公害研究所 見学記	【8】	262
奥野良之助：人体における胃の役割に関する実験的研究 ——その起原についての考察	【12】	406
奥野良之助：大学教授のモラル	【14】	482
奥野良之助：“1000メートル以下クラブ”始末記	【16】	565

奥野良之助：生物地理談話会始末記	【17】	602
奥野良之助：「京大生態学講座在郷軍人会」始末記	【18】	643
奥野良之助：車文明批判	【19】	649
奥野良之助：阪上教授への手紙—チエルノアイリ原発事故に関連して—	【22】	773
奥野良之助：金沢城明け渡し異聞—金沢大学総合移転始末記—	【23】	853
奥野良之助：金沢城明け渡し異聞（2）	【24】	888
奥野良之助：現実主義者のある日の幻想	【29】	1085
奥野良之助：現実主義者のある日の幻想（2）	【32】	1225
奥野良之助：ヒキガエルの自然誌（1）	【29】	1113
奥野良之助：ヒキガエルの自然誌（2）	【30】	1143
奥野良之助：自衛隊を海外に派遣するな—わが「金沢大学 平和問題ネットワーク」の果敢なる？闘争—	【30】	1168
奥野良之助：金沢大学平和問題ネットワークの果敢なる戦い（その2）	【31】	1187
奥野良之助：「犬死に」考	【32】	1246
奥野良之助：「自由の森学園」見学記	【33】	1269
奥野良之助：大学における学生の地位 —新進気鋭の学教官は、今、何を考えているか—	【33】	1298
奥野良之助：「助教授」考—筋違いの恩師・故徳田御稔助教授のこと	【34】	1320
奥野良之助：北朝鮮とアメリカと、どちらが怖い？	【35】	1372
奥野良之助：「銃は禁止されてもナイフがあるよ」	【35】	1378
奥野良之助：身体の中の歴史—比較形態学入門（1）	【36】	1428
奥野良之助：身体の中の歴史（2）	【37】	1451
奥野良之助：身体の中の歴史（3）	【38】	1499
奥野良之助：身体の中の歴史（4）	【39】	1541
奥野良之助：身体の中の歴史（5）	【40】	1602
奥野良之助：身体の中の歴史（6）	【41】	1629
奥野良之助：身体の中の歴史（7）	【42】	1673
奥野良之助：身体の中の歴史（8）	【43】	1717
奥野良之助：身体の中の歴史（9）	【44】	1761
奥野良之助：二年間にわたる最終講義（1）	【37】	1479
奥野良之助：二年間にわたる最終講義（2）	【39】	1573
奥野良之助：二年間にわたる最終講義（3）	【42】	1696
奥野良之助：二年間にわたる最終講義（4）	【43】	1739
奥野良之助：二年間にわたる最終講義（6）	【47】	1891
奥野良之助：二年間にわたる最終講義（7）	【50】	2052
奥野良之助：国を守るということ	【38】	1520
奥野良之助：一少年の戦争体験と戦後日本の歩み（1） —金沢大学総合科目「戦争と平和」における講義—	【40】	1585
奥野良之助：一少年の戦争体験と戦後日本の歩み（2） —金沢大学総合科目「戦争と平和」における講義—	【41】	1643
奥野良之助：ダーウィン「種の起原」を読む（1）	【45】	1817
奥野良之助：ダーウィン「種の起原」を読む（2）	【46】	1862
奥野良之助：ダーウィン「種の起原」を読む（3）	【47】	1902
奥野良之助：ダーウィン「種の起原」を読む（4）	【48】	1942
奥野良之助：ダーウィン「種の起原」を読む（5）	【49】	2010
奥野良之助：「種の起原」を読む（7）	【50】	2027
奥野良之助：毛沢東「実践論・矛盾論」を読む（1）	【46】	1847
奥野良之助：毛沢東「実践論・矛盾論」を読む（2）	【47】	1922

奥野良之助：毛沢東『実践論・矛盾論』を読む（3）	【48】	1955
奥野良之助：毛沢東『実践論・矛盾論』を読む（4）	【49】	1979
奥野良之助：沖縄は日本の「植民地」だった	【45】	1837
奥野良之助：裁判官の文章と論理と倫理	【48】	1966
奥野良之助：生態学の素描	【おまけ】	1～59
奥野良之助：「日本生物学会」閉会のご挨拶	【最終下】	2150
小野喜三郎：夢のような話――是非21世紀に実現を	【35】	1362
小野喜三郎：よい本ちょっとつまみぐい	【最終上】	2068
海老人空耳：クラゲはPULANKTONであるか	【21】	729
蛸嬉雲：“手記” ある生態学徒の墮落（1）	【3】	99
蛸嬉雲：“手記” ある生態学徒の墮落（2）	【4】	134
蛸嬉雲：“手記” ある生態学徒の墮落（3）	【5】	157
加藤喜代志：日常生活と政治――政治へのかかわり	【10】	341
加藤喜代志：社会科学の方法――アダム・スミス 『天文学史』をめぐる	【12】	397
加藤喜代志：映画「水俣病――その20年」の感想文を読む ――センチメンタリズムからヒューマンニズムへ	【19】	654
加藤喜代志：移転とストの大英図書館	【31】	1177
加藤喜代志：奥野良之助氏のひと仕事	【最終上】	2074
加藤初江：今、教科書問題を考える	【11】	366
金井塚努：「日本生物学会」中国支部から	【最終下】	2114
上市米：斟酌歌心正体学	【24】	882
上市米：続・斟酌的歌心正体学	【25】	929
カラボネヤミ：書評 『津軽共和国憲法』	【21】	764
関西支部事務局長：総括	【最終上】	2112
関西支部：臨時總會報告	【最終上】	2113
？：時事放談	【28】	1070
公家：仏陀生物学（1）	【28】	1064
公家：仏陀生物学（2）	【28】	1067
倉淵真悟：ナミウスムシ <i>Dugesia japonica</i> の地理的隔離による変異	【1】	1
栗間修平：『地震・震災・火事・巡査』（書評とおぼしきもの）	【15】	530
栗間修平：ある独裁の記録	【22】	793
栗間修平：しいの奥拾いの記	【25】	920
栗間修平：ねずみとり戦記	【27】	1011
栗間修平：わが「業病」記	【28】	1043
栗間修平：小人閑居して	【33】	1283
栗間修平：病棟閉鎖始末記	【36】	1417
栗間修平：土地が欲しいのは誰か？	【40】	1620
栗間修平：“中海”から見えるもの	【42】	1689
栗間修平：日本生物学会私史	【45】	1807
栗間修平：日本生物学会消滅の日（序）	【最終下】	2148
高隆三：残さるべき一つの記録（1）	【13】	442
高隆三：ある夏のできごと	【14】	469
小口助教授：雪の所有権	【10】	354
小林美香：連想ゲーム――教育編	【20】	700
さいとうしげる：データ偽造事件	【2】	41
流石三十美：教員採用試験考	【16】	560
佐藤卓也：さかな魚サカナ	【最終上】	2082

佐道昭：江戸時代の飢饉	【12】	417
沢田精一：SP盤を聞いて現在のステレオについて思うこと	【10】	323
沢田さつき：生物学会誌の思い出	【最終下】	2129
3局長：書評 シンプソン著奥野良之助訳『ダーウィン入門』	【26】	975
ザンクトT. U.：書評 奥野良之助著『生態学入門』	【5】	171
自然原人：「非自然保護論」を切る	【2】	54
下菊マダム：書評 『車を捨てた人たち』	【16】	569
しょうじれいこ：女性の経済的自立こそ	【43】	1732
小知間周：黄色い糸	【13】	458
澄田宏：アナクシマンドロスの生命発生説		
に関する若干の考察（1）	【13】	433
澄田宏：アナクシマンドロスの生物発生説		
に関する若干の考察（2）	【17】	577
澄田宏：アナクシマンドロスの生物発生説		
に関する若干の考察（3）	【18】	613
第1編集局長：一研の思い出	【最終上】	2072
田亀源五郎：雑木林が残されるために必要なもの	【最終上】	2114
田中敏之：課題研究発表会の事後報告として	【15】	536
丹後支部長：丹後だより（1）	【16】	571
丹後支部長：丹後だより（2）	【20】	704
チーフテンMK1：人間の魔性（2）	【8】	258
チビ：書評 なだいなだ著「わが輩は犬のごときものである」	【5】	169
チビ：書評 ノーマン・マクベス著長野・中村訳『ダーウィン再考』	【2】	68
チビ：書評 近ごろ読んだ本	【13】	463
チビ：書評 メイ・レティス『睡眠革命—		
われわれは眠りすぎていないか』	【19】	671
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ（1）	【29】	1104
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ（2）	【29】	1108
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ（3）	【29】	1110
椿二十郎：せまい日本 ゆっくり行こうぜ（4）	【30】	1140
椿二十郎：ウクレレ漫談	【31】	1185
椿二十郎：ばーかもん	【34】	1340
戸田盛康：環境論論争における「主体」の行方—生態学と環境概念	【23】	817
長井幸雄：自然環境保全という名の自然破壊	【最終上】	2101
中山美香子：残念!! 「日本生物学会誌」	【最終上】	2102
ナマケモノ：カッコウとヨシキリ	【20】	685
なまけもの：木と本	【最終上】	2081
鯨太郎：大学とのかかわり	【5】	151
にこりめ小僧：閑人だより（1）	【20】	692
ニセコロジスト：「何冊かの本」—思いつくことあれこれ	【最終上】	2115
農林水産部長：里山考（1）—農業問題	【最終上】	2119
農林水産部長：里山考（2）—里山を守ろうということ	【最終上】	2120
野良：哲学雑話（1）毛沢東（その1）	【1】	32
野良：哲学雑話（2）毛沢東（その2）	【2】	43
野良：哲学雑話（3）毛沢東（その3）	【5】	153
野良：哲学雑話（4）毛沢東（その4）	【6】	181
野良：大学学（その1） 大学とはなんぞや、を問う学問	【2】	46
野良：大学学（2）	【4】	121

野良：金沢大学だより――4年生の1年	【3】	78
のら：いっせい草抜きボランティア――理学部の人は勤労奉仕がお好き	【33】	1310
畑 安次：戦後50年と天皇・「靖国」・自衛隊	【36】	1404
腹立益数：無題	【1】	30
春咲小紅他：リレ＝落語	【27】	1022
半仙半魚：偏見と独断（1）	【2】	37
半仙半魚：偏見と独断（2）	【2】	39
半仙半魚：偏見と独断（3）	【3】	73
半仙半魚：偏見と独断（4）	【4】	109
半仙半魚：偏見と独断（5）	【5】	141
半仙半魚：偏見と独断（6）	【10】	321
半仙半魚：偏見と独断（7）	【12】	414
半仙半魚：偏見と独断（8）	【15】	525
半仙半魚：偏見と独断（9）	【23】	850
半仙半魚：偏見と独断（10）	【28】	1041
半仙半魚：偏見と独断（11）	【30】	1137
半仙半魚：私のきらいなもの（人）その1	【34】	1317
半仙半魚：私のきらいなもの「大学入試」	【37】	1448
半仙半魚：続「私のきらいなもの」	【43】	1736
半仙半魚：アミズ（AMIDS）	【最終下】	2135
平田幸雄：進化のゆくえ	【最終上】	2103
フェリス・エレガンス：東京で	【9】	285
富家雅子：大学の風景（その1）	【最終下】	2126
藤田茂：体験的“周期的四肢マヒ”の研究	【22】	791
筆無精：ワープロ礼賛	【28】	1061
不名誉教授：例外人生（1）	【17】	594
不名誉教授：例外人生（2）	【21】	747
細見彬文：インド・コーチン大学訪問記	【14】	470
細見彬文：西アフリカ、ダカール大学訪問記	【15】	516
細見彬文：北アイルランド、クィーンズ大学訪問記	【16】	541
本郷支部長：人間生態学への招待（1）	【22】	779
本郷支部長：かくれキリシタンの話	【22】	800
本郷支部長：人間生態学への招待（2）	【26】	967
マジメの中の軟体動物：高校生からの報告（1）	【24】	861
マジメの中の軟体動物：高校生からの報告（2）	【24】	863
松永明美：反原発――汚染食品を食べてガンになりたくない	【27】	1009
松本郁夫：生態学者の精神分析	【13】	454
松本郁夫：生態学者の実存分析	【15】	505
〇〇〇郎：ある大学院生のひとりごと	【35】	1363
万年学生：大学生活18ヶ条	【27】	1027
ミス・コメント：居候ネコの話《ネコとして自覚し自信を持っている 一代目と、人間もネコだとおもっているのかネコの 自覚に欠ける二代目ネコの比較》	【8】	254
水原洋城：猿学万歳（1）	【24】	871
水原洋城：猿学万歳（2）	【25】	905
水原洋城：猿学万歳（3）	【26】	957
宮前俊一：認識が構成されるとき現われる先験的直感の起原について	【1】	11
盛口 満：飯能博物誌モドキ	【33】	1279

盛口 満：毛虫は毛虫	【45】	1804
山田和彦：しめっぽいあのころの私から感謝の気持ちをこめて	【最終下】	2190
遊興人：何を求めるか？	【最終下】	2192
横町の隠居：古い博物屋のボヤキ	【3】	79
ヨミヒトシラス：雨ニモマケズ	【4】	111
黄泉の国の土民：クチをつける	【6】	177
4局長：日本生物学会会長室のご案内	【27】	1032
レオバルト・2：人間の魔性（1）	【7】	213
Y・K：書評 鈴木真一著『大学の秘密』	【12】	416
渡辺 継：村の風景	【35】	1367

その他

生物学語大辞典：こんちゅう	【14】	501
生物学語大辞典：とり	【15】	537
生物学語大辞典：帰化	【16】	559
生物学語大辞典：しっぽ	【21】	746
生物学語大辞典：めいよきょうじゅ・ふめいよきょうじゅ	【21】	765
生物学語大辞典：ちょうちんあんこう	【22】	804
生物学語大辞典：かも	【23】	840
生物学語大辞典：後天性教授願望症候群	【24】	896
生物学語大辞典：うそ	【25】	919
生物学語大辞典：精神免疫	【25】	928
生物学語大辞典：Homo sapiens var. todaisotsu	【26】	955
生物学語大辞典：じえいたい	【28】	1076
生物学語大辞典：こうざちよう	【37】	1450
生物学語大辞典：アミツズ=後天性免疫不全症候群	【43】	1738
新聞記事から：“割りばし”をめぐる農林官僚と製造業者の論争	【18】	640
新聞記事から：“割りばし論争”そのあと	【19】	673
新聞記事から：ふたたび割りばし論争	【29】	1134
金沢大学平和問題ネットワーク：『ネットワーク・ニュース』1～15号	【31】	1188
金沢大学平和問題ネットワークの果敢なる戦い（その3）	【32】	1252
関西支部結成のお知らせ	【34】	1343
通告書	【34】	1344
日本生物学会関西支部 旗揚げ!!!	【34】	1345
日本生物学会 会長公募	【30】	1173
日本生物学会誌最終号 原稿大募集	【44】	1804

編集局から

学会および非学会記事	【1】	36
学会および非学会記事	【2】	71
学会および非学会記事	【3】	108
学会および非学会記事	【4】	140
編集局だより	【5】	174
編集局だより	【6】	212
編集局だより	【8】	284
編集局だより	【9】	318
編集局だより	【10】	356
編集局だより	【11】	396
編集局だより	【12】	432
編集局だより	【13】	468

編集局だより	【14】	504
編集局だより	【15】	539
編集局だより	【16】	573
編集局だより	【17】	609
編集局だより	【18】	646
編集局だより	【19】	680
編集局だより	【20】	715
編集局だより	【21】	769
編集局だより	【23】	857
編集局だより	【24】	899
編集局だより	【25】	938
編集局だより	【26】	987
編集局だより	【28】	1082
編集局だより	【29】	1136
編集局だより	【32】	1262
編集局だより	【33】	1313
編集局だより	【34】	1354
編集局だより	【35】	1390
編集局だより	【36】	1446
編集局だより	【37】	1493
編集局だより	【38】	1528
編集局だより	【39】	1578
編集局だより	【40】	1628
編集局だより	【41】	1665
編集局だより	【42】	1709
編集局だより	【44】	1790
編集局だより	【43】	1755
編集局だより	【45】	1846
編集局だより	【46】	1888
編集局だより	【50】	2064
編集後記	【22】	814
編集、してないけど、後記	【26】	990
編集後記	【27】	1037
真正編集後記	【27】	1039
編集後記	【28】	1083
これが最後の「編集後記」	【50】	2067
会長への手紙	【13】	467
編集者への手紙	【3】	107
編集者への手紙	【4】	140
編集者への手紙	【5】	174
編集者への手紙	【12】	432
編集者への手紙	【17】	607
編集者への手紙	【18】	646
編集者への手紙	【19】	677
編集者への手紙	【21】	766
編集局への手紙	【21】	768
編集者への手紙	【22】	813
編集者への手紙	【24】	898

編集者への手紙	【25】	937
編集者への手紙	【26】	982
編集者への手紙	【28】	1077
編集者への手紙	【46】	1886
編集者への手紙	【47】	1931
編集者への手紙	【49】	2023
編集者への手紙	【50】	2060
会計報告(1977)	【2】	72
会計報告(1978)	【5】	176
会計報告(1979)	【9】	320
会計報告(1980)	【10】	358
会計報告(1981)	【13】	466
会計報告(1982)	【15】	538
会計報告(1983)	【18】	646
会計報告(1984)	【20】	726
会計報告(1985)	【22】	815
会計報告(1986)	【24】	903
会計報告(1987・88)	【27】	1040
会計報告(1989・90)	【28】	1084
会計報告(1991)	【31】	1224
会計報告(1992)	【32】	1268
会計報告(1993)	【35】	1403
会計報告(1994)	【36】	1447
会計報告(1995)	【42】	1714
会計報告(1996)		
『日本生物学会』設立趣意書・投稿規定	【1】	34
『日本生物学会』設立趣意書・投稿規定(改正)	【14】	502
会計報告(1996年度)付:総会計	【最終下】	2154
総目次(1~50号・おまけ号・最終号上下)	【最終下】	2155
総索引(同上)	【最終下】	2164

喜劇は終わった。諸君、喝采し給え。

バート-ヴェン

日本生物学会誌 最終号（下）
編集・発行 日本生物学会
金沢市角間町
金沢大学理学部生物学教室
223号室
編集無責任者 奥野良之助
許可無断転載